
夏の終わりの静かな風

海田 陽介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の終わりの静かな風

【Zコード】

N4067C

【作者名】

海田 陽介

【あらすじ】

東京でアルバイトをしながら小説家を目指している僕は久しぶりに故郷の宮崎に帰つてくる。そこで偶然再会した友人や家族と会話を重ねながら、僕は改めて生きる意味や、これから将来のことを考えていく。僕が東京に戻る頃、夏の終わりの静かな風が吹き始めていて・・・。

偶然の再会

「吉田くんじゃない?」

ふいに背後から声をかけられた。

驚いて振り向くと、そこにはひとりの女性が立っていた。

年の頃は二十代半ばくらいだろうか。きれいな女人だった。

知り合いだらうかと思って僕は記憶の糸を手繰り寄せてみたのだけれど、どうしても思い出せなかつた。それで僕が戸惑つていると、「覚えてない?」

と、彼女は言った。

「ほり、高校のとき同じクラスだつた。」

と、彼女は笑顔で続けた。

その彼女がお出してくれたヒントのおかげで、ようやく僕は彼女のことを思い出すことができた。彼女の名前は狭山ゆかりで、高校のときのクラスメイトだ。

咄嗟に思い出すことができなかつたのは、彼女が昔と違つてきれいに化粧をしているせいと、もともと僕と彼女が高校の頃特に親しい間柄だつたわけでもないということがある。

顔を合わせれば話す程度の、そんな知り合い程度の仲だつたのだ。それに考えてみれば、こうして彼女に会つたのも高校を卒業して以来だから、もう七年近くが経つてしまつていうことになる。僕が瞬時に彼女の顔を認識できなかつたのも無理のない話だつた。

「そっか。狭山さんだ。」

と、僕は思い出せなかつたことを誤魔化すよつて曖昧に微笑んで言つた。

「なにしてたの？」

と、彼女は言つた。

僕は彼女の問いに、自分が手にしている漫画雑誌に目線を落とした。手にしていた本がたまたま工口本等ではなくて良かったと安堵した。

「ちよつと立ち読み。今実家に帰つてきてるんだけど、家にいても何もすることがなくて。」

僕はいいわけするよつて答えた。僕は今帰省していて富崎にいる。僕が今居る場所は、JR、地元の日南では一番大きな本屋さんだ。

「そつか。」

と、彼女は納得したよつて軽く頷くと、それから、「ねえ、久しぶりだし、今度ゆつくり話さない？」

と、笑顔で言つた。

「今わたしバイト中でちよつと時間ないんだけど、明日とか、どう？」

「そつか。狭山さんこりでバイトしてるんだ。」

僕は今更のよつて彼女が黒のHプロンを着てこりて氣がついた。黒のHプロンはこの書店店員の制服だ。

「明日だね。べつにいいよ。特に用事もないし。」

今のところ僕には特に予定と呼べるほどのものは何もなかつた。

「良かつた。じゃあ、明日の一時にそこのファミレスで待ち合はせでいい？」

彼女は窓の外を指差して言つた。

窓の外にはジョイフルというファミリーレストランがある。

「うん、それでいいよ。」

と、僕は手にしていた漫画雑誌をもとの棚に戻しながら言った。

「じゃあ、明日の一時に。そこのファミレスで。」

彼女は微笑んで言った。

了解、と僕は答えた。

じゃあ、またねと書いて、彼女は僕に背を向けて歩いていった。

僕は去っていく彼女の後姿をなんとなく少しの間ぼんやりと眺めていた。

翌日、狭山さんは予定通りの時間にやつてきた。

僕たちは若い女の子ウェイトレスに一番奥の窓際の席に通されて、向かい合わせに腰かけた。

平日の午後のファミリーレストランは空いていた。四十代前半から後半くらいの女のひとたちが何組か散らばって席についているだけだった。

窓の外には国道が走り、その国道を挟んだ向かい側には狭山さんが働いている本屋さんが見えた。その本屋さんの隣には信用金庫のビルがあり、その更にとなりは大きな駐車場のついたドラッグストアがある。田舎特有の特に飾り気のない、どちらかといえば地味な風景が窓の外には広がっていた。

僕たちはとりあえずという感じでドリンクバーを注文し、そのあと僕はハンバーグとライスのセットを注文し、彼女はだいぶ迷つてからカツカレ・を注文した。

注文を取ったウェイトレスの女の子が厨房に戻つていくと、僕たちはドリンクバーに飲み物を汲みにいくためにそれぞれ席を立つた。

僕はアイスコーヒーを汲んで席に戻り、彼女はアイスレモンティーをグラスに汲んで席に着いた。

だけど、席についたのはいいものの、僕は咄嗟に何を話したらいいのかわからなかつた。話題なんて探そうと思えばいくらでも見つかりそうな気がするのだけれど、変に緊張してしまつて上手く言葉

がでてこなかつた。

僕がそんなふうに話題選びに惑つてゐると、狭山の方方が逆に、

「吉田くんはいつこっちに帰つてきたの？」

と、僕に気を使って話しかけてくれた。

僕は狭山さんの問いかにアイスコーヒーをストローで軽く口に含んでから、

「つい最近、八月の二十日とかそれくらいかな。」

と、答えた。

「そつか。ほんとについ最近だね。」

と、狭山さんは何が可笑しかつたのか軽く微笑して僕の言葉に頷くと、ふと思いついたようにストローでアイスティーを口に含んだ。

それから狭山さんは頬杖をついて、窓の外に視線を向けると、何か考え事をするようにそのまま黙つていた。そして少し経つてから、「だけでもう、夏、終つちゃうね。」

と、狭山さんは窓の外に視線を向けたまま言つた。そう言つた狭山さんの声は、どこか寂しそうにも感じられた。

「そうだね。」

と、僕は彼女の言葉に同意すると、彼女の視線の先を辿るように窓の外に目を向けた。さつきの彼女の言葉のせいか、窓の外の日の光に照らされた世界は、夏本来の輝きをいくらか失いはじめているよつとも思えた。

「わたしね。」

と、狭山さんは窓の外に視線を彷徨わせたままゆっくりとした口調で言つた。

「一年の季節のなかで一番夏が好きなの。だから、その季節が終つてしまつてなんだか寂しくて嫌なのよね。」

と、彼女はそう言と、僕の顔に視線を戻して、口元でいいわけするように微笑んだ。

「そういう気持ちってなんとなくわかる気がするけど。」

と、僕は狭山さんの科白に同意してから小さく微笑した。

「夏つて暑くて嫌だなつて思うこともあるけど、でも、子供の頃の夏休みのイメージのせいかな、すごく楽しいことが待つているような、お祭りのような、そんなイメージがあつて、だから、その夏が終つてしまつと思うと、なんだかちょっと名残惜しいような気持ちになるかな。」

「うん。そう。そんな感じ。」

と、狭山さんは僕の意見に同意して微笑すると、またアイスティーを少し口に含んだ。僕もつられるようにして少しアイスコーヒーを飲んだ。

耳を澄ますと、店内のBGMに混ざつて微かに蝉の鳴き声が聞こえた。それは残された最後の力を振り絞つて鳴いているかのようなどこか夏の終わりを感じさせるものだった。

「そういうえば吉田くんつていまどこに住んでるの？実家に帰つてきたつていうことは、富崎には住んでないってことだよね？」

と、狭山さんはふと思いついたように尋ねてきた。

「うん、今は東京に住んでるよ。」

と、僕は簡単に答えた。

「大学で東京に行つたんだけど、なんとなくそのまま。」

「そつか。」と、狭山さんは頷いてアイスティーを口に含むと、それから僕の顔を見て、

「東京では今何してるの？」

と、訊いてきた。

「サラリーマン？」

僕は彼女の問いに軽く首を振った。僕は東京でフリーターをしている。でも、僕は彼女の問いに正直に答えるのに多少の躊躇いを感じた。というのは、フリーターをしているということを話すと、大抵のひとが怪訝そうな顔つきをするからだ。だいたい決まって何故就職しないのか、将来不安じやないのかとかそういう話になるので、僕はなるべく自分がフリーターでいることを他人に話したくないという気持ちがあった。

でも、結局、僕は狭山さんに嘘をつくのが嫌だったので、正直に事實を話した。大学を卒業するときに就職しようかどうしようか悩んだのだけれど、結局就職しなかつたこと。就職しなかつたのは他にやりたいことがあつたからなのだと云うこと。

「そつか。じゃあ、吉田くんは夢を追いかけてるんだ。」
と、狭山さんは僕の顔を感心したように見つめて言った。

「いや、夢を追いかけてるとか、そんなカッコイイものじゃないよ。

」
と、僕は苦笑して慌てて否定した。僕は自分の顔が赤らむのを感じた。

「それに、そのやりたいことじゃ、まだ全然結果出せてないしね。」
と、僕は少し眼差しを伏せるようにして続けて言った。

「・・そつか。」

と、狭山さんは僕の科白にどう声をかけていいのかわからない様子で曖昧に頷くと、何秒間か間隔をあけてから、

「でも、まだ、そのやりたいことっていのとは、続けてるんでしょ？」

と、励ますように続けて言った。

「・・うん、まあ、一応ね。」

と、僕は歯切れ悪い答えを返した。

「じゃあ、いいんじゃない？まだまだこれからだよ。きっとなんとかなるつて。頑張つて。継続は力なりだよ。」

狭山さんは優しい笑顔で言った。

「そうだね。ありがと。」

僕は狭山さんの科白に少しきいちなべ微笑して答えた。

そして、僕がそう答え終わつた頃に、僕と狭山さんが注文した料理がテーブルに運ばれてきた。

僕たちは一旦会話を中断すると、おのれの料理を口に運んだ。口にした料理はいかにもファミリーレストラン的な味がした。可もなく不可もなくといった感じ。

「ところで、吉田くんのやせつたいことってなんなの？」

「いや、小説を書いてるんだよ。」

と、僕はちよつと恥ずかしかつたけれど、正直に言った。

「へー。す、じいね。」

と、狭山さんは意外な言葉を耳にしたように表情を輝かせて僕の顔を見つめた。

「いや、べつにすじくないよ。さつきも言つたけど、まだ全然結果とか出せたわけじゃないし。」

僕は苦笑して答えた。何だか狭山さんに誤解を与えたてしまったようで申し訳ない気持ちになつた。

「でも、わたし、小説を書いているつひとこはじめてあつたかも。」

狭山さんは楽しそうに微笑んで言つた。そしてグラスに残つてい

たアイスティーを一息に飲み干してしまふと、

わたしも結構本読むのが好きだよ」

狹山さんは明るい笑顔で続けて言った

「どんなの読んでるの?」

と、僕はなんとなく尋ねてみた。

すると、狭山さんは視線をやや斜め上にあげて思案するよつた表

情を浮かべた。そして、少し経つてから、

「わざと何でも読む方が

と、考へながら話すよつてやつてついた口調で答えた。

「石田衣良はそんなに読んだことないけど、東京ゲートウェストパ

が書いてゐるが、これは、

גָּדוֹלָה

と、微笑して頷いて、

「あれは面白かつたかなあ。」

と、何か物語の余韻に浸るよ

かべた。

「あと、あのひと、他にも恋愛の話とかも書いてるんだけど、それ

も良かつたよ。

と、狭山さんはオススメしてくれた。

僕は微笑してまた今度読んでみるよと答えた。

「ヨーロッパの文化は、アーティスティックな表現から始まり、最終的には、政治的、社会的、経済的な問題へと発展する」という見方がある。

逃亡田舎へはとんがなが始まる。」
から何が難しかつての読んでそつともある。

「いや、そんなアホなーが。

と、僕は狭山さんの言葉に苦笑して答えた。

「僕もわりと普通なの読んでるよ。村上春樹とか吉本ばななとか。たまに夏目漱石とかの古い小説を読んだりすることもあるけど、基本的に古いものよりも最近のやつの方が好きかな。」

それから僕たちはお互いがこれまで読んできた本のことや好きな作家について話した。

そして会話がひと段落すると、僕たちはもう一度飲み物を汲むために席を立つた。

僕はコカコラーや、狭山さんはメロンソーダだった。あまり身体には良くなさそうだけれど、グラスのなかに入った彼女のメロンソーダは透き通ったきれいなエメラルドグリーンをしていた。それは僕に夏の思い出のようなものを連想させた。

「だけど、吉田くんつていつもから小説を書き始めたの？高校のときつて確かに書いてなかつたよね？」

と、狭山さんは汲んで来たばかりのメロンソーダを一口ストローで啜つてから不思議そうに言った。

「いや、実はもう高校の頃から書いてたよ。」

と、僕は微笑して答えた。

「ただ恥ずかしいものだから誰にも見せてなかつたけど。」

「そつか。」

と、狭山さんは頷いてまたメロンソーダを少し飲むと、
「何が切つ掛けとかあつたの？小説を書いてみようかなって。
と、僕の顔を見て興味深そうに尋ねてきた。

「いや、なんとなくだよ。」

と、僕はいいわけするように微笑して答えた。

「高校生くらいのときつて、ついつい色んなことを深刻に考えすぎちゃつたりするでしょ。生きる意味とか、そういうの。それでそのとき自分が考えたことや思つたことを何かの形に纏めてみたいなあつて思つたんだよ。それが切つ掛けといえば切つ掛けかな。それに、高校のとき、従姉妹のお姉ちゃんがちょっと重い病気になつてた

りして・・だから、余計そういうことを考える機会が多かつたつて
いうのもあるんだけど。」

「そつか。」

と、狭山さんは僕の言葉に頷くと、目線を落として少しの間何か
を考えるように黙つていた。そしてしばりしてから顔をあげると、

「その従姉妹のお姉ちゃんって何の病気だったの？」
と、遠慮がちに尋ねてきた。

「ちょっと重い肝臓の病気。」

と、僕は答えた。

「でも、なんとか無事回復して、今は福岡の方でピアノの先生して
る。一時期、ほんとにちょっと危ない時期もあったから、何事もな
くてほんとに良かつたんだけど。」

「そつか。」

と、狭山さんは頷くと、また目線を落として何秒間の間黙つていた。
眼差しを伏せた彼女の顔は少し哀しそうにも映つた。

「実はね。」

と、少し経つてから彼女は再び顔を上げると、いそらか言いづら
そうに口を開いた。

「わたしのお姉ちゃんも今ちょっと重い病気で入院してるので。
と、狭山さんは唐突に言つた。

僕は彼女の突然の言葉にどう答えたらいのかわからなかつた。
それで黙つていた。狭山さんはまたメロンソーダを一口口に含むと、

「・・お姉ちゃん癌なの。」

と、狭山さんはテーブルの上辺りに視線を落として少し小さな声

で言った。

僕は驚いて彼女の顔を見つめた。

「会社の健康診断ときに見つかって。でも、まだ早い段階で見つかったからたぶん大丈夫だと思つんだけどね・・・」

と、狭山さんは半ば自分に言い聞かせるように言った。

「半年くらい前かな、癌の摘出手術をして。今は抗がん剤の治療で癌が再発しないようにしているところなんだけど・・・」

僕は彼女が口にしたあまりにも重い事実にしばらくの間適切な言葉を見つけることができなかつた。そしてだいぶ経つてから、

「大変なんだね。」

と、何の慰めにも、励ましにもならない言葉を言つた。

「・・・だけど、せつとき吉田くんのお姉さんが奇跡的に回復したってこう話を聞いてちょっとと勇気づけられたかな。」

と、狭山さんは顔を上げて僕の顔を見ると、口元でいくらか無理に微笑んで言つた。

「狭山さんのお姉さんも無事回復するといいね。」

と、僕は言つた。

狭山さんは黙つて頷いた。

それから狭山さんはメロンソーダをストローで少し飲んだ。僕もコカコーラを少し飲んだ。

僅かな沈黙があつた。

「だけど、わたしもお姉ちゃんが病気になる一年前くらい前までは

東京に住んでたんだよ。」

と、じざりくじてから狭山さんは深刻になつてしまつた雰囲気を変えようとすると、明るい口調を装つて言った。

「わたしも吉田くんと同じで大学で東京にいたの。そのあと就職してそのまま東京にいたんだけど・・だから、そのせいかな、東京にずっといたせいだ富崎弁ほとんど忘れてやつたの。」「

狭山さんは微笑して言った。

「そうだよね。さつから狭山さんはいつ標準語ぽい喋り方だなつて思つてたけど。」「

「無理に話さうと思えば話せなくもないんだけどね。」

と、狭山さんは微笑していいわけするように言った。「でも、そうすると、すぐ変な感じになつちゃうの。富崎弁と標準語が「」ちや混ぜになつちゃつて。だから、最近はずっと標準語で通してるの。」

「べつに東京帰りを気取つてるとかそういう感じじゃないんだよ。」「と、彼女は小さく笑つて言った。

僕はわかつてこいるといつよつに微笑んだ。

「だけど、吉田くんも喋り方、なんか標準語ぽいよね? やっぱりわたくしと同じで長く東京にいたせいだ富崎弁忘れやつとか、そんな感じ?」「

僕は彼女の言葉に苦笑して首を振つた。

「いや、僕の場合は喋るひとに影響されやつだけだよ。」

と、僕は微笑しながら答えた。「狭山さんが標準語で喋つてゐるからつこつこつられて標準語ぽい喋り方になつちゃつてゐるけど、家では普通に富崎弁で話してゐるよ。」「なるほど。」「

と、狭山さんは小さく微笑して頷くと、もう残り少なくなつたメ

ロンソーダを飲み干した。

ウェイトレスがやつてきて僕たちの食器を片付けていった。

狭山さんはウェイトレスの女の子が厨房に戻つて行つてしまつと、「そりいえば気になつてたんだけど、吉田くんついていま東京のどのへんに住んでるの?」

と、尋ねてきた。

「吉祥寺からちよつと離れたところかな。」

と、僕は答えた。

すると、彼女の表情に笑顔が広がつた。

「わたしも吉祥寺の近くに住んでたんだよ。」

と、狭山さんはいくらか声を弾ませて言つた。

「そうなんだ。」

と、僕も声を弾ませて言つた。狭山さんが吉祥寺に住んでいたと「い」ことを知つて、急に親近感を覚えて嬉しくなつた。

それから僕たちはひとりしき吉祥寺についての話題で盛り上がつた。吉祥寺という町が適度に開けていながらそれでいて緑豊かな場所であること。交通の便が良いこと。お互いが知つているカフェや雑貨やさん等のことについて。

「・・・狭山さんが富崎に戻つてきたのは、やつぱりお姉さんの病気が関係してるので?」

と、僕はひとしきり吉祥寺について狭山さんと語りあつたあとで、ちよつと躊躇つてから尋ねてみた。そして訊いてしまつてから、やつぱり「い」つ質問はやめておくべきだったかな、と、僕は後悔した。というのは、僕がその質問をしたことで、狭山さんの顔からみるみる笑顔が失われていいくのがわかつたからだ。

「うん。だいたいそんなこりかな。」

と、狭山さんは少しきこちなく口元で微笑んで答えた。

「わたしの家つて、お母さんが早くに病氣で死んじゃつてて、お父さんとお姉ちゃんとわたしの三人家族なの。」

と、狭山さんは軽く眼差しを伏せるようにして続けた。

「それで、お母さんが亡くなつてからはお姉ちゃんがだいたい家のこととか面倒見てくれてたの。わたしとお姉ちゃんつて七つも歳が離れてて、わたしにとつてお姉ちゃんはお姉ちゃんつていうよりもお母さんみたいな存在だつたんだけど・・・。」

僕は答えようがなかつたので、たた黙つて狭山さんの話に耳を傾けていた。

「お姉ちゃんは富崎の短大を卒業したあと、ひつちで地元のスーパーに就職したの。わたしは大学で東京に行つたから、たまにしかこつちには戻つてこなくて・・だから家のことはお姉ちゃんに任せっきりだつたの・・家のこととかお父さんのこととか。でも、さつきも話したけど、お姉ちゃん病氣になつちやつたでしょ?だから、わたくしが今度は富崎に戻つてることにしたの。家のこともあるけど、お姉ちゃんの看病とかもお父さんひとりじゃ大変だし。」

「・・・そつか。」

と、僕は頷いた。そしてそれから、

「何か余計なこと訊いちゃつたみたいでごめん。」

と、僕は謝つた。

「うん。」

と、狭山さんは僕の言葉に口元で弱く微笑むと軽く首を振つた。

しばらくの沈黙があつた。

僕は何か話さなくちゃと思つたけれど、こんなとき何をどう言つたらいいのかわからなかつた。沈黙のなかには店内に流れているBGMと食器の触れ合つと音と他のお客さんの話声が聞こえた。

いつの間にか蝉の鳴き声は聞こえなくなつてしまつていた。

「・・・だけど、最近はいつも戻つてきて良かつたなあつて思うこともあるかな。」

じくらか長い沈黙のあとで、狭山さんは口を開くとそう静かな口調で言つた。

「こつちは東京と違つて食べ物美味しいし、自然はたくさんあるし。それに、こつちに戻つてきただことで、家族と一緒に過ごす時間も増えたしね。・・正直東京で会社勤めしてた頃は毎日毎日サービス残業の連続で疲れちゃつてたし・・だから、かえつて良かつたのかなあつて最近は思う。」

「今はバイトだから比較的時間もたくさんあるしね。こつやつて吉田くんとフアミレスでゆっくり話す時間もあるし。」

狭山さんはそう冗談めかして言つと軽く笑つた。

それにつられてようにして僕も少し笑つた。そしてそれから、

「東京では何の仕事してたの？」

と、気になつたので尋ねてみた。すると、狭山さんは、

「服飾関係の仕事。」

と、答えた。

「わたし、服のバイヤーの仕事がしたかったの。海外とかに行つて売れそうな服を見つけてくるとかそういうの。」

「そつか。ずこいね。」

と、僕は感心して狭山さんの顔を見つめた。

すると、狭山さんは苦笑して首を振つた。

「べつに全然す」くなんてないよ。」

と、狭山さんは笑つて言つた。

「そういうバイヤーになるためには最低でも一、三年は売り場に立つて経験を積まないと駄目なの。でも、わたしの場合はすぐに会社辞めちゃつたから、全然バイヤーとかの仕事はやれなかつたの。」

「・・・でも、お姉ちゃんの病気が治つたら、これからまたいちからはじめてもいいんじゃない？」

と、僕は少し考えてから言つた。

「そうだね。」

と、狭山さんは僕の科白に少し寂しそうに微笑んで頷いた。

「吉田くんは頑張つて有名な小説家になつてね。」

と、狭山さんは冗談めかして言つた。

僕は曖昧に微笑して頷いた。

大きな雲が太陽を遮つて、店のなかが暗く翳つた。そして少し経つてからそれはまたもとに戻つた。ふと窓の外の空に視線を向けてみると、ずっと遠くの空の高い場所に飛行機雲が細くたなびいているのが見えた。

妹の話

狭山さんと別れて家に戻ったのはもう夕方近くだった。

家に戻ると、妹が子供部屋でテレビを見ていた。

僕の実家には個人の子供部屋というものがない。あるのは十五畳くらいの大きな部屋がひとつあるだけで、それを共同で使っている。

妹とは五つ歳が離れている。現在妹は二十歳でアメリカの大学に留学している。でも、今向こうの大学は長期の休みに入っているらしく、その間特にすることもないでの、妹は地元の富崎に帰つてくることにしたようだつた。

「どうにいっちょっとたて？」

と、妹はテレビ画面に視線を向けたまま富崎弁で僕に話しかけてきた。

「ちょっとファミレスに。」

と、僕は言った。

「昨日日本屋さんで高校のときの同級生にばつたり会つて、それで久しぶりだし、ご飯でも食べようつていう話になつたんだよ。」

「じゃあて。」

と、妹は僕の返事にどうでも良さそうに頷いた。

「裕子はいつ帰つてきたの？」

と、僕は尋ねてみた。今朝僕が起きたときには妹はどこかに出かけていて家にいなかつたのだ。

妹は部屋の壁にかかっている時計に目を向けると、

「一時間くらい前やね。」
と、答えた。

僕は妹が座つてゐる近くのフローリングの床の上に腰を下ろした。
それから、
「どこにいったの？」
と、特にどうしても知りたいとこうわけでもなかつたのだけれど尋ねてみた。

部屋のなかは冷房がよく効いていて涼しかつた。窓から差し込んでくる日光は微かに夕暮れの色素を帯び始めていた。もうすぐ夜になるんだな、と、僕はなんとなく思った。

妹はテレビ画面に視線を向けたまま、
「友達のお墓参り。」
と、短く答えた。

「お墓参り？」

僕ちよつと奇異に思つて妹が口にした料白を繰り返した。

すると、妹は僕の方を振りむいて、
「あれ、兄ちゃんに前に話さんかつたけ？」
と、怪訝そうな声を出した。
「ほひ、わたしの同級生が死んだ話前したがね。」
と、妹は非難するよつて言つた。

「ああ。」

と、僕は曖昧に頷いた。

あれは確かに一年くらつ前に僕が実家に帰省したときのことだ。

そのとき妹は自分の同級生が自殺してしまったことを僕に話した。

僕は妹から話を聞いただけなので詳しい事情まではわからないのだけれど、妹の話によると、その妹の同級生は自分の進路のことや、家族についての問題で悩んでいたという話だった。僕はそのとき妹が浮かべていたいつになく思いつめた表情と、僕がそのとき感じたこととを思い出した。

僕はそのとき、妹の話を聞いて、その同級生は何も死ななくとも良かったんじゃないか、と、思ったものだった。でも、今ならその自殺してしまった同級生の気持ちも少しは理解できるような気がした。ひとは極端に気持ちが沈んでしまうと、何かを冷静に考えたり、受け止めたりすることができなくなってしまふものなのだ。全てが嫌になつてそこから逃げ出したいような弱い気持ちなつてしまふ。

僕もその妹の同級生ではないけれど、意味もなく気持ちが沈んでしまつて、何もかもがどうでもいよいよ気持ちはなつてしまふことが、そんなにいつもというわけじゃないけれど、あった。

「今年がその自殺した子の三回忌やつたつちやわ。だから、みんなでお墓参りにいってきたとよ。」

と、僕が頭のなかで考えないとをしていると妹は続けて言つた。

「その子のお墓は海の見える、見晴らしのいいところにあつてかいよ。」

と、妹は続けた。

「ちよつとした山の上にあつちやわ。だから遠くに海が見えてかいよ、今日は天気が良かつたらきれいに海が見えちよつて、静かな風が吹いちよつてかい、なんかそういう場所にいるせいか、妙に寂しいような気持ちになつたね。」

「そつか。」

と、僕は妹の科白に頷いた。どう感想を述べたらいいのかわからなかつた。

「・・わたしよ。」

と、少し間を置いてから妹は言つた。

「その友達に聞いてみてえことがあつちやわ。」

僕は振り向いて妹の横顔を見つめた。俯き加減に眼差しを落とした妹の顔は、何かに對して腹を立てているように見えし、何かを考え込んでいるようにも見えた。

「あんたは自殺したことで幸せになれたてつて訊きてえねえ。」

と、妹は言つた。

「だつて自殺したつて何の解決にもならんわ。・・・ただ残されたひとたちが哀しいだけかいよ。」

「・・そうだね。」

と、僕は同意した。でも一方で、そつとわかついて、どうしよもないときもあるのだとも思つた。でも、口に出しては何も言

わなかつた。

妹はしばらぐの間黙つてテレビ画面を眺めていた。でも、それはただテレビ画面に視線を向けているだけという感じだつた。妹の視線はそこにある映像を通り越して何か全然べつの風景を見ているようにも思えた。

「わたしよ。」

と、しばらくしてから妹はまた静かな口調で話はじめた。

「その子が自殺する一週間くらいに前に朝学校で少し話したことがあるつちやわ。わたし、そのとき宿題全然やつてなくてかいよ、朝早く学校に来てやるつと思つたちやわ。そしたらその子がわたしよりも早く教室にきちよつてかいよ、勉強しちよつたちやわ。」

「うん。」

と、僕は相槌を打つた。

「でも、その子は朝早く学校にきて勉強するよつな子じやなかつたつちやわ。だかいよ、どうしたて。珍しいねつてわたし声かけたつちやわ。そしたらよ、その子、何て答えと思つ?」

僕は妹の問いかわからないうつように軽く首を振つた。

「そしたらよ、その子、今度から俺心を入れ替えることにしたつちやわつて答えたつちやわ。そう言つたときのその子の目がすこく澄んじよつてかいよ・・・なんやろ、不自然なくらい静かで決意に満ちた目をしちよつてかいよ・・もしかしたら、そのときにはもう、自分は自殺するつて決めちよつたのかもしれんねつて今になつてみると思つちやわ・・だかい、そのときのことを思い出だすと、わたし、すゞぐ哀しくなるね・・哀しくなるつていうか、その子の気持ちに何も気がついてあげられなかつた自分が嫌になるつていうか・・

上手く言えんぢやけど・・・

「・・・そつか。」

と、僕は頷いた。僕のなかには今妹が口にした科白に對して答えられるような確かな言葉といつもののが、何もなかつた。

じばらぐの沈黙があつた。僕も妹も黙つていた。

沈黙のなかにつけつ放しになつてゐるテレビの音と、クーラーの風の音が遠くに聞こえた。家の近所で犬がほえる声も聞こえた。部屋のなかに差し込む日の光は次第に紅の色素が濃くなつてきていた。

「今日のお墓参りにはその子が付き合つちよつた彼女も一緒に来ちよつたつぢやけどよ。」

と、いくらか長い沈黙のあとで妹は口を開くと言つた。

「うん。」

と、僕はまた相槌を打つた。

「その彼女は、わたしたちと話しづよつときは全然明るくて普通やつたぢやけど、こぞお墓の前でみんなで手を合わせたときは、やつぱりちよつと泣いぢよつたね。」

妹は軽く目を細めて言つた。いま田の前にその友達の泣いている姿が浮かんでいるといつたふうだつた。

「好きなひとを失つてしまつたつていつ喪失感は、簡単に乗り越えられるものじやないんだろうね。」

と、僕は言つた。そしてそう答へながら、僕は海の見える高台にある、ひつそりとした墓地を想像した。そこには夏の濃い緑の木々が生えていて、それらの木々は海から吹き上げてくる静かな風に揺られて優しい音を紡いでいる。

「・・・わたしよ、その泣いている友達を見ちよつてかいよ、可憐
そうになつて、何とか慰めてあげたいなつて思つたちやわ。」

と、妹は言つた。

「でもよ、なんて声をかけたらいのかわからんかったね。」

と、妹は言つた。

「・・・わたしたちつてよ、結局無力やがね。」

と、妹は五秒間ほど黙つていてから呟くよつた声で言つた。そう
言つた彼女の声はひどく頼りなく響いた。

「すぐ近くで泣いているひどがいてもわたしたちは何もしてあげ
ことができんわ。ただ見ていることしかできんくてかいよ。・でも、
考えてみると、世の中の大半のことがそうやなつて思つちやつわ。
そのわたしの友達のことにしてもそうやけどよ。・たとえば今世界
のどこかでは戦争が起こちよつてかい、苦しんでいるひとたちがい
るわけやわ、でも、そのひとたちのためにわたしができることって
何があるひやうひつかと思つてもよ、ほとんど何もないわけやわ。
・・わたしが現地にいつてそのひとたちのために何かするつていつ
てもよ、たかがしれてるやうしよ。・。」

「・・・そうだね。」

と、僕は妹の言葉に同意した。

確かに僕たちにできるひとなんてほとんど何もないのかもしけな
いな、と、思つた。といつか、田舎の自分はもう自分のことだけ
で精一杯で、他人のことまで思いやる余裕がなかつたりする。いや、
余裕がないわけではなくて、僕は基本的に自分の興味のあることと
か、どうやつたら自分がもつと幸せになれるかといったことしか考
えていないような気がした。

そう考えると、自分がすごく意地汚い人間のように思えて、嫌になつた。そしてそのことに気がついた今この瞬間ににおいても、そういつた自分を積極的に変えていこうという意志を、僕は持てないでいた。要するに、僕は自分のことしか考えていない、最低の人間なのかもしれなかつた。

そういう自分に比べると、妹はきちんと色々なことを考へているんだな、と、僕は感心して妹の横顔を見つめた。困っているひとたちや悲しんでいるひとの姿を見て、結果的にそのひとたちを救うことはできなかつたとしても、そのひとたちのために何かをしようと、救いの手を差し伸べようと思つことができる人間なんだな、と僕は妹に対しても尊敬の念を抱いた。

たとえ何もできなかつたとしても、そんなふうに他人のために心を痛めたりすることができるということは、大切なことだし、尊いことだと思った。そしてそういう気持ちを持つことこそが、いつか何かの形で他の誰かを救うことができるんぢやないかとも思つた。

僕がそつやつて思つたことを口にすると、

「そりやといいつぢやけどね。」

と、妹は頷いた。でも、妹は僕の言葉にあまり納得したようには見えなかつた。難しい表情を浮かべて何か考え込んでいる様子だつた。

どうやら彼女の心に広がつた、暗く重い、湿度を持つた感情は、僕の安っぽい理屈くらいではどうすることもできないようだつた。だけど、それもそりやうとな、と、僕は思つた。僕だつてもし、誰か大切な友達を、自殺という形で失つてしまつたとしたら、きっといつまでもいつまでもその死んでしまつた友達のことを考へ続けることになつただろうと思つた。

生きることの意味や、死ぬことの意味について。そしてそれらのことに対する答えというものは、そう簡単には見つからないだろうとも思った。もしかすると一生かかっても永久に答えなんて見つからないのかもしない。そして、ときどき思い出したように友人の死が、あるいは死そのものよりも重く、激しく、自分の心にのしかかってくることになるんじやないかと僕は想像した。

時と共に夕暮れの光は濃度を増していき、やがてそれは手に触れることができるくらいの密度を持つた。そんな深い夕暮れの光に包まれていると、ふと今自分がどこにいるのかさえもわからなくなってしまいそうだった。

次の日はお昼近くに起きて、遅い日の朝食なのか、早い日の昼食なのかわからぬ食事を済ませた。食べたのは、母の作ってくれたご飯と味噌汁と鯵の開きだつた。一人暮らしをしていると、なかなかこういったものを食べる機会はないので、少し大袈裟かもしれなければ、久しぶりに人間らしい食生活を送つたような気持ちになつた。

妹はまだぐつすりと眠り込んでいた。妹の睡眠欲にはちょっと尋常じゃないものがあつて、下手をすると夕方近くまで眠つていることがある。起こしてもどうせ無駄だらうと思つたのでそのままにしておいた。

食事を済ませると、子供部屋に戻つて、特にすることもないので本を読んで時間を過ごすこととした。手に取つたのは、大川裕一というひとが自費出版した小説だつた。富崎に帰つてきたときに、本屋さんの郷土本のコーナーでたまたま見つけて面白そつだつたので買ってみることにしたのだけれど、読みはじめた小説は、好みにもよるだらうけれど、なかなか興味深く読むことができた。

物語は、若い男女の夫婦が、生まれたばかりの子供を病氣で失つてしまつところからはじまつていた。

子供には生まれつき心臓に欠陥があつた。手術したものの、欠陥に気がつくのが遅かつたため、結局子供の命は助からなかつた。

夫婦は子供の遺骨を抱えて実家に戻る。故郷の墓に子供の遺骨を埋葬するためだ。

その夫婦の実家は、海辺の小さな町にある。

ふたりは子供の遺骨を丁寧に埋葬したあと、その足で、子供の頃よく遊びにいった海辺を訪ねる。ふたりは小学校の頃からの幼馴染だ。

そこでふたりは死んでしまった子供のことについて話す。もし子供が成長して大きくなつていたらとか、あのときもつと早く子供の病気に気がついてあげることができていたらといった、どうにもたどり着けず、むしろ話することで返つて哀しみを深めてしまうような会話がしばらくのあいだ淡々と続けられる。

やがてふたりの間には沈黙が訪れる。それはまるでふたりが失つてしまつたものそのもののような重さと密度持つた沈黙だ。

そんな深い沈黙のなかにいくつもの波の音が吸い込まれていく。

ふたりは黙つてそれぞれの思考のなかに沈み込んでいる。

いつもはきれいな青色をしてくるはずの海は、今は曇つていて、暗く沈んだ色合いをしている。

と、一瞬雲に切れ間が出来て、そこから一筋の光が差し込む。その光に照らされて、一部分だけ明るく輝いた海面は、何か神秘的な存在がそこに舞い降りてきたかのよつとも見える。

その光景を目にした妻は、それまで座つていた浜辺から立ち上がり、ふらふらとその光に誘われるようにして波打ち際まで歩いていく。

その妻の行動を目にした夫は、ふと不安にかられて妻のあとを追いかけていく。そして、

「どうしたんだ。」と、声をかける。

すると、妻は夫の方を振り返つて、

「今、誰かの声が聞こえたような気がしたの。」と、答える。

「小さな子供のような声だつた。」と、妻は続けて言つた。
もしかしたらわたしたちの子供が何か伝えとしているんぢやない
か、と。

夫はそんなことのあるはずがないと内心思つのだけれど、妻のことを気遣つて、そうかもしぬないね、と、優しく答えて特に否定しない。というか、彼自身も思う。もしかしたら、ほんとうに自分たちの子供が何か伝えようとしていたのかもしぬない、と。

というのは、夫は、妻が波打ち際に向かつて歩き出したとき、妻の言ひとおり、誰かの声を聞いたような気がしたのだ。でも、それはただの錯覚に違いないと反射的に否定した。だけど、もし、その声が、ほんとうに子供の声だつたとしたら、と、彼は考える。子供は自分たちに一体何を伝えようとしていたのだろう、と。

耳を澄ましてみると、無論、子供の声なんて聞こえてくるはずもない。

束の間海を照らしていったやわらかな日の光は、再び雲に遮られて、失われてしまつ。あとにはまた潮騒の響きと、耳元を吹きすぎてい強い風の音だけが残る。

打ち寄せる波の音と、風の音を重ね合わせるようにして聞いてみると、それは誰かの哀しい歌声を聞いているように夫には感じられる

た。そしてそれは同時にひどく懐かしもあった。ふと足元に視線を落としてみると、そこにはひとつ貝殻があった。きれいな白い貝殻だった。夫はしゃがみこんでその貝殻を拾つと、それをポケットにしまった。

やがてふたりはきたときに同じように車に乗ると帰つていぐ。

夫は海岸線の道を黙つて車を走らせながら、ふとちらりと助手席に座つた妻の方に視線を向けてみる。

妻は車の窓に頭をもたせかけるようにして、どこか疲れた表情を浮かべて暗く沈んだ海に視線を彷徨わせている。

彼は妻に何か声をかけようと思うのだけれど、でも、何もかけるべき言葉を思いつくことができない。頭のなかに浮かびかけたいくつかの想いは、しかし、明確な形を結ぶ前に砂のように脆く崩れ去つてしまつ。

彼は諦めて車の運転に神経を集中させる。

やがて、海岸線の道は終わり告げ、彼らの目の前に見慣れた小さな町が見えてくる。

この小説を読み終ると、灰色の色素が微かに溶けた冷たい海水に意識が包まれたような気持ちになつた。この物語の曖昧で静かな感じが、心のなかを出口を求めていつもまでもぐるぐると彷徨い続けるような感覚があつた。たとえば海で泳いだと、寝るときになつても波に揺られている感覚がずっと身体に残つてゐるようだ。

最後の場面で、主人公が、妻に声をかけようとして、何もかける言葉を思いつくことができないところが、寂しいと感じた。

ふと部屋の時計に目をやつてみると、時刻はまだ一時半を少しおと回つたあたりだつた。僕は喉の渇きを感じたので、麦茶でも飲もうと思つた。

子供部屋を出て、キッチンに向かう。そして冷蔵庫から麦茶の入ったタッパーを取り出すと、それをコップに注いで一息に飲んだ。麦茶はよく冷えていて美味しかつた。

妹はまだ眠つているのだろうかと思つて妹が眠つている畳の部屋を見てみると、案の定、妹はまだ眠つていた。僕は試しにもう一時半だよと妹に声をかけてみたのだけれど、妹は生返事をするだけで、一向に置きだす気配はなかつた。

「のまま家にても退屈なだけなので、どこかに出かけようと思つた。でも、どこに出かけようと考へて、僕はさつき読んだ小説のせいか、急に海が見てみたいような衝動に駆られた。

僕は服を着替えて出かける準備をすませると、母にことわつて母の車を借りた。そしてその母の車で僕は海に向かつた。

僕の実家のある小さな町は、さつきの小説ではないけれど海がすぐ近くにあって、車で三十分程も行くと、比較的きれいな海水浴場まで行くことができる。

車を運転するのはずいぶんと久しぶりのことなので少し緊張もしたけれど、海岸線の道をひとりで運転するのは楽しかつた。平日なので道も空いていて、自分の好きなペースで運転することができた。

車のカセットテキには、僕がずっと昔に録音したテープがそのまま残っていて、そのずっと昔に録音したテープを聴きながら車を運転した。

テープに録音されていたのは一、三年前に、僕が大学生だったときによく聴いていた音楽だった。それらの音楽に耳を澄ませていると、懐かしい気持ちになつた。僕は大学生だった頃のことを色々思い出した。

そして、ほんの少しだけ切ないような気持ちになつた。知らないうちにずいぶん色んなことが過去の出来事になつてしまつたんだな、と、僕は感じた。僕は漠然とした喪失感を感じた。いつの間にか、かつてそこにあつたはずものがもう既に失われてしまつているというのは、寂しい感じのするものだつた。まるで雨の日の、人気のない浜辺を見ているみたいに心がしんとなつた。

やがて僕の運転する車は目的地の海水浴場にたどり着いた。僕は駐車場に車を止めると、車を降りて、海水浴場に向かつて歩いていつた。

訪れた海水浴場はもうお盆を過ぎてしまつていて、ほとんど人影がなかつた。浜辺の隅の方でカップルが水遊びのようなことをしているだけだつた。

お盆を過ぎてしまつと、クラゲがたくさんで、泳ぐことができなくなつてしまつ。だから、お盆前まであれだけ盛況だった海水浴場も、まるで道端に投げ捨てられて形がいびつに変形してしまつた空き缶みたいにほとんど誰からも顧みられなくなつてしまつ。おまけに今日は曇つていて、よけいに人影が少なく、浜辺にはまるで世界中から忘れ去れてしまつたかのような静けさがあつた。

僕は波打ち際まで歩いていくと、そこに立ち止まって、寄せては返す波をぼんやりと眺めた。空の灰色の雲の色素を映して暗く沈んだ色合いをした海面を見ていると、ふと物悲しい気持ちになった。

僕も先月の七月で二十六歳になつた。二十六歳という年齢は、世間一般的の常識から考えればまだ十分に若いといえるのだけれど、しかし、自分のなかではずいぶん歳を取つてしまつたな、という感覚があつた。もう、二十六歳なんだ、と思った。まだ十九とか二十歳の頃は自分の未来に、明るい可能性や希望をいくらでも見出すことができた。それこそ努力次第で何でもできるような気がしていた。

でも、二十六歳という年齢になつてしまつと、自分の未来がすっかり色あせてしまつて、を感じないわけにはいかなかつた。かつて信じていた華やかな将来が、実は、自分の無邪気な妄想に過ぎなかつたことに、嫌でも気付かされてしまつ。

僕はこれから先どうすればいいんだろうと暗いに気持ちになつた。二十六歳でフリーターをしているなんて、すごく情けないような気がした。この先ほんとうに小説で結果を出すことができるのだろうとか考えると、自信が持てないのが正直なところだった。

それなら小説を書くことはきつぱり諦めて、就職すればいいのかもしれなかつたけれど、でも、小説を書くことを諦めた人生に、一体どんな望みを持てばいいのだろう、と、ついつい大袈裟に考えてしまう自分がいた。所詮人生なんてこんなものだと諦めて生きていくしかないのだろうか。

あるいは就職して働きながら書くという法方もくはないのだろうけれど、でも、僕はあまり器用な方ではないので、就職して、義

務や目標に追われながら小説を書いていけるとは決して思えなかつた。

実際に就職して働いている友人の話を聞いていると、みんな一様に終わりのないサービス残業やノルマ等に追われて、あまり自分の時間が持てないのが実情のようだつた。そういう話を聞いていると、積極的に就職しようといつ気持ちにはなれなかつた。じゃあ、この今までいいのかと思つて、無論そんなことがあるはずがなくて、僕の思考は堂々巡りを繰り返してしまつ。

結局僕は甘えていいるだけなのだ。それはわかつてた。でも、自分がそんな甘えた弱い気持ちはどうすることもできなかつた。

僕の思考は次第に先細りになつて、出口を見出せずに、自分のなかで小さく弱くなつていつて、最後は波の音に飲み込まれるようにして消えてしまつた。あとには大袈裟な言い方をすれば絶望に似た暗い気持ちが自分の感情のなかにぼんやりと残つてはいるだけだつた。

僕はその場にしゃがみこむと、手を差し出して、打ち寄せてきた海の水に触れてみた。手に触れた、白く碎けた海の水はひんやりとして冷たかつた。その海水の冷たさは、優しいようでもあり、懐かしいようでもあつた。

僕はずつと昔の子供の頃に家族でこの海水浴場に遊びにきたときのことを懐かしく思い出した。あのときは今と違つて天気はよく晴れてい、目映い夏の太陽が気持ちよく世界を照らしていた。だけど、それはもうずっと過去の出来ことだつた。

僕はしゃがみこんでいた状態から再び立ち上がると、歩いていつて、近くにあつた自動販売機でコカコーラを買つた。そして適当に

浜辺に腰を下ろすと、田の前に広がる海をぼんやり見つめながら口
カコーラを飲んだ。

強い風の音と、いつくもの波の音が耳元を吹きすぎていった。

やがて口コーラの入っていた缶が空になってしまって、僕は砂浜か
ら立ち上がり、駐車場までゆっくりと歩いて戻った。

そして車に乗りると、またひとりで車を運転して町まで戻った。

その日の夜は久しぶりに地元の友達と会う約束があった。

その友達とは高校を卒業して以来すっかり連絡が途絶えてしまっていたのだけれど、つい最近になつて再び彼と連絡を取り合うようになつたのだ。ミクシーという、インターネットを利用としたコミュニティサイトを通じて、彼が僕にメールをくれたのが切っ掛けだつた。

彼の名前は大久保彰典という。

彼は高校の頃、僕なんかよりもずっと勉強のできる優秀な人間だつた。彼は高校を卒業すると、福岡にある、国立の、かなり難易度の高い大学に進学した。

だから、当然彼は今頃エリートになつているのだろうと僕は思い込んでいた。

ところが、彼とのメールのやりとりをしていくうちにわかつたことは、彼が僕と同じでフリーターをしているということだった。彼がフリーターをしているということを知つた僕はすごく意外に思つて、そのことを尋ねてみたのだけれど、彼がメールで説明してくれたところによると、彼は大学の就職活動の時期に、いわゆるひきこもりのような状態になつてしまつたらしかつた。

僕たちが就職活動をした時期は、まだまだ日本全体が不景氣で、なかなか思うように就職先が決まらない時代だつた。

当然彼もその厳しい時代の洗礼を受けることになった。三十社以上の会社の採用試験を受けて、ひとつも内定をもらうことできなかつた。それまで勉強関係で苦労らしい苦労をしたことのなかつた彼にとって、それはたぶんはかなり屈辱的なことだったんじゃないかと思ひ。

おまけに、彼には両親の期待もあつた。彼のお兄さんは彼以上に勉強もスポーツもできるひとで、大阪に本社のある大手の企業でバリバリ働いていた。

だから、両親は当然のように、次男である彼にも、それと同等か、あるいはそれ以上の結果を彼に求めた。

でも、彼はなかなかその期待に応えることができなかつた。

三十社以上の会社に落とされてからも彼は諦めずに就職活動を続けたけれど、なかなか事体は好転しなかつた。

そのうちに彼はどんどん自分に自信がもてなくなつていった。自分という人間は社会から必要とされていないんじゃないと思つようになつていつた。

暗い心はさらに暗い思いを呼び込み、ついに五十社目の採用試験に落ちたところで、彼は何もかもが嫌になつてしまつた。就職活動することも止め、必要のない限り、彼はほとんど住んでいたアパートから外にでなくなつた。

ときおり両親から就職活動の進捗に関して電話がかかってきたけれど、そんな電話がかかってくるたびに、彼は激しく両親のことをのしつた。自分がこんなふうになつてしまつたのはお前たちのせ

いだ、と、彼は罵倒した。そんな言葉を口にしたのは彼としても初めてのことだった。

父親も母親も自分のことなんて愛していないのだという深い猜疑心が、そのときの彼の心のなかには広がっていた。

必要な試験だけは受けてどうにか大学だけは卒業したけれど、彼は大学を卒業してからの日々をずっとアパートに引きこもって過ごした。

誰とも会わなかつたし、誰とも話さなかつた。両親が電話をかけてきても、全部無視した。両親が生活費を振り込んでくれていたので、飢え死する心配はなかつた。

そのようにして半年あまりの歳月が流れた。

やがて心配になつた両親が彼を富崎まで連れ戻しにきた。彼は抵抗したけれど、父親に半ば強引に説得され、富崎の実家に帰つた。実家に帰つてからもしばらくの間、彼の引きこもりの生活は続いた。でも、長い時間を両親と過ごすことで、次第に硬直していた彼の心もゆつくりともとに戻つていった。まず、両親が彼に謝罪の言葉を述べたことが大きかった。

自分たちはこれまでお前に過度な期待を持ちすぎた、これからはお前の好きなように生きればいいと父親はいった。生活のことは面倒をみてやるし、無理に就職しなくてもいいとまで父親は言つてくれた。

その言葉のおかげで、彼はだいぶ気持ちが楽になつた。もちろん、

完全に回復したというわけではなかったけれど、それでも以前よりはだいぶマシになつたのは確かだつた。かつてのように思いつめて死にたい等とは思わなくなつた。

中学時代や、高校時代の友達と再び連絡を取り合つようになり、遊びにいつたりするよになつたのも、彼の心を早く回復させるの手伝つた。

そのようにして、彼はまた次第に少しずつ外の世界にでていけるようになった。半年程前からは家の近くのコンビニでアルバイトもはじめ、そのアルバイトをする傍ら、税理士になるための勉強もはじめていると彼はメールのなかで語つていた。

僕は彼とメールのやりとりをしていくなかで、僕の知らないところで、彼がそんなにも暗く、辛い時期を過ごしていたことに、まず驚かされた。彼は高校の頃どちらかといふと明るくて、[冗談なんかもたくさん言つたりする方だつたからだ。

その頃彼を思つと、彼がひきこりなつてしまつとはとても思えなかつた。そしてそんな明るかつた彼が、ひきこもりになつてしまつより他なかつた程の厳しい現実を、僕は考えた。生きるということは、僕が考へているよりもずっと難しく、ときに試練に満ちているようだつた。

近くのコンビニまで大久保が車で向かえにきてくれるといつこと
だつたので、僕は待ち合わせ場所のコンビニに予定の時間よりも少
し早く行つた。そして、そこで雑誌を立ち読みして時間を潰した。
すると、しばらくして僕は背後から背中を軽く叩かれた。

すつかり雑誌に夢中になつてしまつていたので、ちょっと驚いて
後ろを振り向くと、そこには背の高い大久保が笑顔で立つていた。
たぶん百八十センチくらいはあるんじやないかと思う。僕は身長は
百七十センチしかないので、どうしても彼を見上げる格好になる。

久しぶり見た大久保は、僕が想像していたよりもずっと明るい表
情をしていた。ひきこもりになつてしまつたと大久保はメールのなか
で語つていたので、僕はてつくり彼はもつと思いつめた表情をして
いるのかと思つていのだ。

「久しぶり。」

と、僕は微笑して言つた。大久保に最後に会つてからあまりにも
歳月が流れてしまつてるので、まるで初対面のひとに会つたとき
のような気恥ずかしさがあった。

大久保にしてもそれは同じことのようで、彼はちょっと照れ臭そう
に笑うと、

「元気しちよつたて。」

と、宮崎弁で訊いてきた。

「うん。元気やよ。」

と、僕も宮崎弁で笑つて答えた。

僕たちはひとまずコンビニから外で出ると、大久保の運転してき

た軽自動車に乗り込んだ。それから、お腹も空いたし、とりあえず夕食でも食べようという話になつた。

久しぶりに友達と再会したのだから、いつもの場合、飲みに行くのが普通なのだろうけれど、僕の場合、お酒が全く飲めないので、車でちょっとといったところにある、上手いカツ丼を食べさせる店に行くことにした。

僕としてはべつに大久保にあわせてどこか飲み屋に行つても良かつたのだけれど、僕がそう言つと、彼は俺もべつに酒を飲むのはそんなに好きじゃないからと言つて、普通ご飯を食べにいくことになつた。

訪れたカツ丼屋はちょうど夕食時ということもあってそれなりに混雑していたけれど、上手い具合に僕たちが店に入るのと同時に席が空いて座ることができた。僕たちは奥のテーブル席に向かい合わせに腰を下ろした。

しばらくして注文を取りに来た店員に、僕も大久保もカツ丼を注文した。

注文した料理が運ばれてくるまでの間、僕たちは最近町に新しくできた、ユニクロや、マクドナルドといった、チヨーン展開している店のことについて話をした。

僕の実家のある町はかなり田舎なので、最近なつてやつとそれらの店ができたのだけれど、田舎育ちの僕たちにとつて、自分の住んでいる町にユニクロやマクドナルドといった店があるというのは、決して大袈裟な言い方ではなく、かなり衝撃的なことだった。それまるで東京タワーや六本木ヒルズといった建物が、ある日突然自

分の住んでいる町に出現したかのような驚きと興奮を僕たちにもたらした。

そのうちに注文した料理が運ばれてきて、僕たちはほとんど無言でカツ丼を食べた。食べたカツ丼はかなり美味しかった。これで値段は八百九十円しかしないのだから、すごく満足感がある。東京で食べたら千五百円くらいは取られるんじゃないかといつも気がした。田舎だと、手頃な値段で美味しいものが食べられるので、貧乏な僕にとっては嬉しい限りだ。

料理を食べ終えると、僕たちはコーヒーを追加注文した。

注文したコーヒーはすぐに運ばれてきて、僕たちはその運ばれてきたコーヒーをチビチビと飲みながら色々な話をした。何しようと話すのはほとんど七年ぶりのことなので話題がつくることはなかった。お互いの共通の友達が今どこで何をしているかといった話や、お互いが覚えてこよう覚えていないうな思い出話を思いいつくままに話した。

やがて、会話がひと段落したところで、僕がちょっとトイレに行つてくると言つて席を立つた。彼が席を立つてしまうと、僕はちょっと手持ち無沙汰になつて、なんとなく窓ガラスの外の景色に視線を向けてみた。田舎なので窓の外の世界は、濃度の高い暗闇に塗りつぶされてしまつていて。僕は久しぶりにこんなに深い夜の闇を目にしたような気がした。

そのうちに彼がトイレから戻ってきて、また僕の向かい側に腰を下ろした。僕はテーブルの上のお冷を一口口に含むと、ちょっと躊躇つてから彼に近況を訊ねてみた。もう以前のように激しく落ち込んだり、精神的に不安定になつてしまふことはないのか、と。

僕の間に、彼はちょっときこりなく口元で微笑してから、もう今はだいたい大丈夫だ、と、答えた。もちろん今でもたまに気持ちがふさぎこんでしまうことはあるけど、でも以前に比べれば全然大したことないし、税理士になるための勉強も順調に進んでいる、と、彼は笑顔で答えた。実は今度税理士になるための試験を受けようと思つてゐるのだ、と、彼は明るい表情で僕に語つた。

「そつか。結構順調みたいで良かつたね。」

「と、僕は安心して言つた。

「うん。まあね。」

「と、彼はちょっと照れ臭そうに口元で微笑むと、

「吉田はどうなの？」

「と、尋ねてきた。

「小説は書けちょっと？」

メールのやりとりをしていくなかで、僕が小説家になりたいと思つてゐることはもう既に彼には伝えてあつた。

「どうだらうね。」

僕は彼の視線を避けて軽く眼差しを伏せなければならなかつた。
「書いてることは書いてるけど・・・・でも、最近はちょっと自信が持てなくなることがあるかな。」

と、僕は口元で曖昧に笑つて誤魔化すように答えた。それから、僕は少し迷つてから、僕が昼間海辺で考えたことを彼に話して聞かせた。

二十六歳という年齢は結構いい歳だと思つこと。このとき小説を書き続けて結果を出せるのか、いまひとつ自信が持てないでいること。かといって、諦めるだけの覚悟もできずにいること。そんな僕

のいくぶん感傷的で惨めな話に、彼は決して茶化したりせずに真剣に耳を傾けてくれた。

「……まあ、なかなか難しい問題やね。」

と、大久保は僕の話を聞き終わると、ちよつと考え込むような顔つきをして言つた。それから、彼はふと思いついたようにテーブルの上に手を伸ばすと、そこにあるお冷を口元に運んで一口啜つた。そしてまたもとのテーブルの上に戻した。

店員がやってきて、僕と彼とのグラスに新しくお冷を注ぎ足してくれた。僕たちは軽く頭を下げて店員に謝意を伝えた。

「俺も先のことを考えると結構不安になつたりすっかいね。」

と、彼はそう言つと、少しの間何かに思いを巡らせるように黙つていた。

「前、メールでも話したけどよ。」

と、しばらくしてから彼はゆつくりとした口調で話はじめた。

「俺、大学のときに一回ひきこもりなつてしまつてかいよ・・それ以来、ちょっとしたことですぐに落ち込んでしまうようになつたつちやつたわ。すぐにはやってだめなような気がしてしまつてかいよ。・・・だかい、吉田の気持ちわかる気がすんね。」

と、彼は静かな口調で言つた。

それから彼はまたお冷を手に取つて口元に運んだ。僕も彼にうれようにしてお冷を少し飲んだ。

僕たちの座つている席から少し離れた場所に男女の入り混じつた学生風の集団がいて、彼らが楽しそうに喋つたり、笑つたりする声が聞こえた。

「……でもよ。」

と、彼は短い沈黙のあとで再び口を開くと言った。

「最近ひとつわかったことがあるつちやわ。」

と、彼は言った。

「うん。」

と、僕は頷いて彼の顔を見つめた。

「そんなふうによ、物事を深刻に考えても何もならんなつて。案外、なんとかなるわつて気軽に考えちよつたほうがよ、結構物事つて上手くいくもんやなつて。少なくとも精神的にはそれでだいぶ楽になるし、そうやつて心にゆとりがあるとよ、結構前向きな気持ちになれるもんやつちやなつて。」

と、彼はそり言つて軽く微笑すると、

「だかい、吉田もよ、そんなふうに将来のことを思いつめて考えたりせんでよ、もつと気軽に考えればいいちやわ。確かに世の中にはこんなふうにいきるべきだみたいなモデルがあるけどよ、でも、ひとつにはそれぞれのペースがあるしよ、生き方があるちやつかいよ、無理にそれに合わせんでかいよ、自分の思つよつに生きればいいと俺は思つちやつわ。吉田が小説書きたいと思つければたら書けばいいぢやねえと。また就職したくなつたらそのときに考えればいいと俺は思うけんね。結構なんとかなるもんやつて。」

彼は優しい口調でそう言った。その言葉には、長く苦しい時期を乗り越えてきたひとだからこそ発せられる、温かみと力強さがあつた。

僕はちよつとの間彼の言葉が自分の身体のなかに染み渡つていくのを待つように黙つていてから、

「ありがとう。」

と、言った。

「なんか大久保のおかげでちょっと気持ちが楽になった気がする」と、僕は照れ臭いのを誤魔化すために軽く微笑して言った。

「相談料をもらわんといかんね。」

と、僕の科白に、彼はそう[冗談めかして言つと、少し笑つた。

僕もそれにつられるようにして少し笑つた。

店を出ると、彼がちょっと夜景でも見に行かないとか言い出して行くことになった。

男一人で夜景を見に行くのも妙なものだなとは思つたけれど、僕は自分の地元の町にそんな夜景を見る事のできる場所があるなんて知らなかつたので興味をひかれた。

彼の言つ、その夜景の見える場所というのは、車で三十分程狭い山道を登つたところにあるらしかつた。もともとその山道は神社に行くためのものらしいのだけれど、その道の途中に少し開けた場所があつて、そこから夜景を見る事ができるのだという話だつた。

僕たちはこんな狭い山道でもし対向車が来たらどうしようかとひやひやしながらクネクネと蛇行する山道を苦労して登つていつた。そしてようやくのことで目的の場所にたどり着くと、道端の隅に車を駐車して、夜景の見える場所まで歩いていつた。

山の上にいるせいか、夏だというのに、半袖ではかなり肌寒く感じられた。空気にはもう微かに秋の匂いが混ざつていた。その匂いを嗅いでいると、いよいよ夏ももう終わりかけているのだと感じて、なんとも言えず物悲しさを感じた。まるで一瞬心のなかに、秋の日の、透明な日の光がすりつと差し込んできたかのように心がしんとなつた。

ちょっとした展望台のようなところがあつて、そこから夜景を臨むことができた。小さな町なので、スケールが小さくて全然大したことではないのだけれど、それでもきれいなことはきれいだった。ど

ちらかというと物静かな光の粒が重なり合つてささやかではあるけれど美しい輝きを放つていた。

「ほら、あそこに道路があつがね。」

と、僕が目の前の夜景に見とれていると、横から大久保が話しかけてきた。振り向いて彼の顔を見てみると、彼は目の前に広がる夜景を指差していた。それで僕が彼の指さしている方向に視線を戻すと、

「あそこに、道路と道路が交差するところがあがつね。」

と、彼は説明して言った。

「うん。」

と、僕は彼の科白にただ頷いた。

「あそこを中心にして町の光を見ると、ちょっとハートの形に見えるぢやが。」

と、彼はそう特意そうに言と、自分の言葉を冗談に紛らわせるように軽く微笑した。

見てみると、確かに彼の言つとおり、道路を照らす街灯の光が、町をハートの形に区切つているように見えなくもなかつた。

「そんなの誰に教わつたの？」

と、僕が彼の方を振り向いて冷やかすように尋ねると、彼はちょっと照れ臭そうに笑つて、

「彼女やね。」

と、白状した。

「やつぱりか。」

と、僕は彼のちょっと照れたような表情が可笑しくて笑つた。

大久保の説明してくれたところによると、彼には現在付き合つて一年になる恋人がいるようだった。彼が現在付き合つているのは、高校時代の同級生で、彼女と付き合つようになつたのは、大学の夏

休みのときにはばつたり彼女と再会したのが切っ掛けらしかった。

そのとき大久保は地元の自動車学校に通うために帰省していたのだけれど、その自動車学校に彼女も通っていて、お互いに顔見知りだということもあって、それから彼らは親しく話すようになつたようだつた。とはいっても、すぐに付き合うようになつたわけではないらしく（大久保は福岡の大学に通っていたけれど、彼女の方は宮崎の大学に通つていた。しかも、その当時の彼女にはもう既に決まつた恋人がいた。大久保の方にしてみても、特に彼女を女性として意識していたわけではなかつた）自動車学校を卒業してからのふたりの関係はただのメール友達としてのみ続いたみたいだつた。

やがて、大久保が大学四年の半ば頃からアパートにひきこもるようになると、その関係すらも途絶えてしまつたらしい。（ひきこもりの生活を送つていた大久保にとって、彼女とメールのやりとりを続けていくような気力は残されていなかつた）しかし、そのあとで大久保が父親に半ば強引に説得されて宮崎に戻ると、次第に彼の心にもいくらか余裕が生まれるようになり、大久保はふとまた彼女のことが気になりだしたらしい。というのも、大久保は彼女とのメールのやりとりを一方的に終わらせてしまつていたので、そのことがずっと気がかりだつたらしいのだ。それで、大久保がどうせ無駄だろうと思いつつも、音信不通にしていたことを謝罪するメールを久しぶりに彼女に送つてみると、意外にも彼女から返事が帰つてきた。

それから、大久保と彼女はメールのやりとりを再開させることになつたようだつた。

大久保はメールのやりとりをしていくなかで、まず自分が就職活動に挫折してひきこもりになつてしまつたことを正直に彼女に告げた。そのことを告げることで、あるいはもしかすると彼女に嫌われ

てしまふんぢやないかと大久保は恐れていたのだけれど、でも、そんな彼の心配をよそに、彼女は親身になつて大久保の話に耳を傾けてくれ、必要に応じてアドバイスもしてくれた。

そのうちにふたりはファミレスや喫茶店等で直接会つて話すようになり、いつの間にか大久保は彼女のことと女性として意識するようになつていつた。（その頃には既に彼女は以前付き合っていた恋人とは別れてしまつていた。社会人になつてお互いにすれ違うことが多くなり、話し合いの末に、別れることになつたのだ、と、のちに彼女は大久保に語つた。）

そして大久保は悩んだ末に、思い切つて自分の気持ちを彼女に告げた。実を言うと、自分は佐藤さん（彼の恋人の名前は佐藤香苗という）のことが好きなのだけれど、もし良かつたら自分と付き合つてもらえないだろうか、と。彼は、ひきもりの、無職の男の愛の告白なんて到底受け入れてもらえないんぢやないかと思つていたのだけれど、でも、嬉しい誤算というか、予想外なことに、彼女は彼の愛の告白を受け入れてくれた。

そのようにして、去年の今ぐらいの時期からふたりは交際をスタートさせたらしかつた。

「なんだかドラマチックだね。」

「僕は大久保の話を聞き終わると、微笑して感想を述べた。

「べつにドラマチックぢやないよ。」

と、彼は照れ臭いのか、僕の言葉を小さく笑つて否定すると、それから、

「吉田は誰かおらんて？」

と、当然といえば当然だけれど、僕に恋人がいるかどうかを尋ねてきた。

「今のところいなーいかな。」

と、僕は曖昧に微笑して答えた。

「そっか。」

と、大久保は僕の返事を聞くと、どう言つたらいいのかわからな
い様子でただ頷いた。

「どこかにいいひどがいればいいんだけどね。」

と、僕は冗談めかして言いながら、何年か前に別れた恋人のことを
ふと少し、思い出した。もう彼女のことは忘れたつもりだったけれ
ど、それとは違う感情が、まだ心のなかには残っていたみたいだつ
た。

僕と大久保は少し間どちらも無言だった。沈黙のなかを夜の色素
を含んだ冷たい風が流れ過ぎて行つた。目の前に広がる町は淡く静
かな光を淡々と放つていた。その静謐な光は網膜を通じて僕の心の
なかに入り込むと、その箇所を微かに震わせていった。

「・・・そのひとつ。」

と、いくらか長い沈黙のあとで、僕は大久保の方を見て言つた。

大久保は振り向いて、いくらか怪訝そうに僕の顔を見た。

「佐藤さんだつけ？ 大久保はそのひとつと結婚したいなどと思つて
るの？」

と、僕はふと思いついて尋ねてみた。僕たちくらいの年齢になると、
と、知り合いや友人の間でもポツポツと結婚する人間が出てくる。
大久保ももしかしたら結婚とかを考えたりしているのかな、と、僕
は気になつたのだ。

僕の間に、大久保は、

「まあね。」

と、ちょっと照れ臭そうに微笑して頷いた。

それから彼はふいに真面目な表情を浮かべると、

「だから、そのためにももうちょっと頑張らんといかんなつて思う。

「

と、大久保は自分自身に言い聞かせるように静かな口調で言った。
「とりあえず、税理士の資格を取つて、就職して。」

彼はそこで言葉を区切ると、

「でも、・・・ そつなるためにはまだまだ時間がかかりそやけどね。」

と、彼は付け足して言つて、苦笑するように小さく笑つた。

僕は彼のその苦笑に誘われるよつにして口元を縋ぱせると、
「お互い頑張らんといかんね。」

と、富崎弁で言つた。

「そうやね。」

と、大久保は頷いた。

それからしばらくの間僕と大久保は黙つて目の前に広がる町の光を見ていた。その微かに青色の色素を含みながら白く輝く優しい光は、じつ見ていると、手を伸ばせばすぐ側に触れることができそうなくらい近くに存在するよつに思えた。

僕は試しに右手を前方の空間に向かつてゆっくりと差し出してみたでも、もちろん、手には何も触れなかつた。手に触れることができたのは、夜の冷たい空氣の流れだけだつた。

光は、手の指先の、闇を超えていった、そのずっと遠くの向こう側にあつた。

再び狭山さんと

それからの日々を、僕は家族で映画を見に行ったり、妹と川に泳ぎにいったり、あるいは一日中家に居て何もせずに過ごしたりした。

ほんとうを言えば、せっかく地元に帰ってきたのだから、久しぶりに誰か地元の友達に会いたかったのだけれど、もうお盆を過ぎてしまっているせい（アルバイト先の関係で僕はどうしてもお盆の間は休みを取ることができなかつた）その友人のほとんどが福岡や大阪といった仕事の先のある地方に戻ってしまつていて会うことができなかつた。

そしてそんなふうになんとなく日々は流れて、僕が東京に戻るつもりでいる予定日も明日になつた。また東京でアルバイト生活がはじまるんだと思うと少し憂鬱な気分になつたけれど、かといって、このままずつと地元に残つていても仕方がなかつた。

それから、僕がふと思い出したのは狭山さんのことだつた。あれから狭山さんは全く連絡を取つていなかつた。僕がこのまま東京に戻つたところで狭山さんは特に何も思わないだろうとは思つたけれど、それでも一応挨拶くらいはしておいた方がいいかなと思つた。それで僕は狭山さんがアルバイトをしている本屋さんを訪ねてみることにした。

僕が狭山さんの働いている本屋さんを訪れるとき、彼女はレジで接客をやつていた。でも、平日なのでお客様も少なく、彼女はわりと暇そうにしていた。彼女は僕が店に入つていくとすぐに気がついて笑顔を浮かべた。僕も軽く手をあげて挨拶をした。

僕は文庫本の「コーナー」を一通り見てまわってから面白そうな本を一冊見つけると、それを持って彼女のいるレジに向かった。
そして僕が文庫本を狭山さんに差し出すと、彼女はそれを受け取つて、

「吉田くん、ひさしふりだね。」

と、にこやかに微笑んで言った。

「ねうだね。」

と、僕も微笑んで言った。

文庫本の値段は四百九十九円だったので僕は財布から五百円玉を取り出して、それを彼女に渡した。彼女はありがとうございますと言つて、僕におつりの十円玉を渡してくれた。彼女がレシートはいるかと訊いて、僕はいらないと答えた。

「明日、東京に戻るよ。」

と、僕は狭山さんが袋に入ってくれた本を受け取りながら言った。

「そつか。」

と、狭山さんは頷くと、軽く眼差しを伏せるようにして、

「寂しくなるね。」

と、言った。

「ねうだね。」

と、僕は言った。

それから、彼女は僕の顔を見るとすかさず躊躇つて聞くと聞をあけて、

「ねえ、吉田くんって今日ひょっと時間ある?」

と、唐突に訊いてきた。

「あるけど、どうして?」

と、僕が少し不思議に思つて尋ねると、

「実はわたし、吉田くんのことお姉ちゃんに話しかけたの。」

と、狭山さんはまるで悪戯がばれて、それを止めるとそのままのよつ

なはにかんだ微笑を口元にうかべながら話した。

「わたしの友達に小説書いてるひとがいるって。そしたらお姉ちゃんが一度吉田くんに会つてみたいって言い出して。だから、もし今日時間があつたらお姉ちゃんに会つてくれない?わたしももう少しでバイトあがりだし。」

僕は狭山さんの突然の申し出に上手く返事を打つことができなかつた。

すると、狭山さんは、

「もちろん、べつに吉田くんに何か予定があるんだつたら無理にはいいんだけど。」

と、狭山さんは慌てて付け加えるよつと云つた。

僕はそつこつ意味じゃないといつよつに軽く首を振ると、
「いや、僕はどうせ今日一日暇だから狭山さんのお姉さんに会つのは全然構わないんだけど、でも、大丈夫なのかなつて思つて。」

と、弁解するよつに言つた。

「小説書いてるつていつても、べつに何か面白い話ができるわけじゃないし。」

「そんなに難しく考えてなくて大丈夫だよ。」

と、狭山さんは僕の科白に笑つて答えた。

「ただ会つてくれるだけでいいから。お姉ちゃん、ずっと病院で退屈しちやつて誰かと話してみたいだけなの。」

「そつか。」

と、僕は頷くと、僕で良かつたらべつに全然構わないけどと微笑んで答えた。

すると、狭山さんはじやあ決まりねと笑顔で言つて、一時間後に

店の前で待ち合わせをすることで話は纏まつた。

約束通り僕が一時間後に狭山さんの働いている本屋さんに行くと、狭山は僕の姿にすぐに気がついた様子で、「吉田くん」と、笑顔で声をかけてくれた。

狭山さんは本屋さんの自動販売機が置いてある前付近に立っていた。それで僕が狭山さんの側まで歩いていくと、狭山さんは、「なんか無理つき令わせちゃって」「めんね。」と、短く謝つた。

僕は微笑してそんなことないよと答えた。

狭山さんが説明してくれたところによると、狭山さんのお姉さんが入院している病院はここから車で一時間程いったところにある、隣の街にあるということだった。狭山さんはアルバイト先まで車できていて、僕たちはその狭山さん運転してきた車に乗って隣り街の総合病院まで向かうことになった。

行きの車のなかで僕が狭山さんのお姉さんのお姉さんのお姉さん尋ねてみると、狭山さんはちょっと考え込むような顔つきをして僕の質問に答えてくれた。

狭山さんの話では、今狭山さんのお姉さんは一回目の抗がん剤の治療が終わつたところで、比較的に病状も安定しているということだった。抗がん剤の投与が終わつたばかりの頃は薬の副作用による吐き気や、痛みが酷かつたらしく、側で見ていてちょっと痛々しくらいだった、と、狭山さんは語つた。

でも、そんなに辛い状況にあるにもかかわらず狭山さんのお姉さ

んは泣き言ひとつこわないらしく、お姉ちゃんはほんとにすうじと思つと狭山さんは話した。でも、そう話した彼女の顔はどこなく哀しそうにも映つた。

そのあと、車内にはどことなく深刻な雰囲気が漂つて、僕も狭山さんもどちらかといつと黙りがちだつた。沈黙の間にぽつんぽつんと言葉を置いていく感じだつた。

車は隣街へと続く海岸線の道を走つていて、窓の外には海が見えていた。でも、今日はどんよりと曇つていて、その窓の外に見える海は物憂げに翳つて見えた。

そのひちに狭山さんの運転する車は隣街の総合病院にたどり着いた。

狭山さんのお姉さんの病室は十畳程の広さを持つた四人部屋で、狭山さんのお姉さんのベッドはその病室の一番奥の窓際にあつた。夏なので窓は締め切られていたけれど、その窓からはずつと遠くの向こうに海を見ることができた。

僕と狭山さんが病室に入つていったとき、狭山さんのお姉さんはベッドを起こして本を読んでいるところだった。狭山さんのお姉さんは僕たちが病室に入つてくると、すぐに気がついて本から顔をあげ、僕たちを歓迎するように笑顔を浮かべた。

狭山さんのお姉さんは思つていたよりも健康そうに見えたので安心した。多少頬のあたりがやつれたりはしていたけれど、髪の毛が抜け落ちていたり、極端にやせ細たりはしていなかつた。

それから付け加えて言つと、狭山さんのお姉さんも、狭山さんと同じできれいなひとだった。モデルや芸能人になれそうなほど際立つて美人というわけではないのだけれど、その意志の強そうな瞳や、何気ない仕草や、ふとしたとき浮かべる表情などから、内側から伝わつてくる静かな美しさを感じた。

それはたとえば山奥を流れる澄んだ川の流れの、その水面に映りこんだ鮮やかな濃い緑の木々の葉を見ているときのよつな涼やかな美しさだった。

「お姉ちゃん、約束通り、吉田くんをつれてきてあげたよ。」「

と、狭山さんはお姉さんの顔を見ると冗談めかして言つた。

「ほんとにつれてきてくれるとは思わんかったけど。」

と、お姉さんは狭山さんの科白に軽く笑つて答えると、改めて僕の顔に視線を向けて、

「はじめまして。狭山の姉です。・・・こんな寝巻き姿で初対面つていうのもあれだけど、いつも妹がお世話になつてます。」

と、丁寧に挨拶をして軽く頭を下げた。

僕はそんなふうにさちんと挨拶をされると思つていなかつたので変に緊張してしまつて、「どうも。吉田です。よろしくお願ひします。」

と、こくりかきこむく挨拶を返した。

そんな僕の挨拶が奇妙に感じられたのか、お姉さんと狭山さんは顔を見合せると、噴出すようにして少し笑つた。僕もつらるようにしてなんとななく小さく笑つた。

「今日はわざわざお見舞いにきてくれてありがとうございます。ゆかりが無理やり連れてきたやつら…」めんね。」

と、狭山さんのお姉さんは僕の顔を見ると言つた。

「わたしが冗談で吉田くんに会つてみたいって言つたのを、ゆかりは本気にしてみたいやつやわ。」

僕は微笑してそんなことないですよと答えると、僕も一度狭山さんのお姉さんがどんなひとなのかと見てみたいと思つていたし、お会いできて良かったですと僕は言つた。

狭山さんのお姉さんは僕の言葉にどこか安心したように微笑する
と、「ゆかりから聞いたんだけど、ほんとに吉田くんって小説書いてる
の?」

と、ちよつと改めた口調で尋ねてきた。

僕はお姉さんの問に、「はい。書いてますよ。」と簡単に答えた。

「そつか。すごいね。」

と、お姉さんは感激したように言つた。

僕はなんだかお姉さんに誤解をとれてしまつたように感じて、

「いや、全然す「こ」へないですよ。」「

と、苦笑して言った。

「小説書いてるつて言つてもプロじゃないし。。。」「

「いや、す「こ」よ。」「

と、お姉さんは僕の言葉を否定して言った。

「わたしも本やつたら結構読む方やけど、自分で物語は書けんかいね。」

「いや、書こいつと思えば意外と書けるかもしれないですよ。」「

と、僕は言つた。

すると、お姉さんはとんでもないといつぱりに首を振つて、「わたしには絶対無理やわ。想像力とかゼロやかいね。」「

と、お姉さんは自嘲氣味に笑つて言った。

「吉田くんつてどんな小説書いてるの?」「

と、横から狭山さんが尋ねてきた。

それで僕はお姉さんの顔に向けていた視線を狭山の方に向けた。

「うーん。どんなのだろう。」「

と、僕は狭山さんの問にちょっと眉根を寄せて答えた。

「一口で説明するのは難しいけど、どちらかといえば文学っぽい感じなのかな。」「

と、僕は少し考えてから言つた。

「文学つていつも色々とあると思つけど、どんな感じ?」「

と、狭山さんが続けて尋ねてきた。

僕は狭山さんのその問にまた更に頭を悩ませてから、基本的には自分の小説を読んだひとが何かについて考えさせられたり、啓発されたり、あるいはその小説を読むことであつたとでも前向きになれ

るよつた物語が書きたいと思つてゐると僕は答えた。

でも、今のところそれが上手くいっているかどうかはわからないけどと僕は付け足して言った。

「今はどんな話を書いちゃうと？」

と、お姉さんが興味を惹かれたよつて尋ねてきた。僕はお姉さんの顔に視線を戻すと、

「今は花の話を書いてます。」

と、簡単に説明した。

「僕の大学のときの友達がモデルなんですけど、その子が、色々苦労しながら冬の花を育つてゐるっていう話・・あんまりストーリーとよべるほどのものはないんですけどね・・でも、その主人公の女の子が色んなひと出会つて話して考えさせられたりしながら成長していくよつた物語にできたらいいなって考えています。」

「へー。面白そうやね。」

と、狭山さんのお姉さんはその瞳のなかに明るい微笑を含ませて僕の顔を見つめた。僕はちょっと照れ臭くなつて軽く眼差しを伏せた。

「もし、その小説が完成したら見せよ。」

と、お姉さんは微笑んで言った。

「郵便か何かで送つてくれてもいいし、今はインターネットもあるし、簡単に送れるぢやろ?わたし、その吉田くんの書いた小説がすごく読んでみたくなつてきた。」

「いや、でも、きっとがつかりすることになると思つから、読まない方がいいですよ。」

僕は苦笑いして言った。

「がつかりなんてせんが。絶対送つてよ。楽しみにしちゃつかいね。」

と、お姉さんは微笑みながら念を押すよつて言つた。

「わたしも吉田くんの書いた小説読んでみたいかも。」

と、狭山さんもお姉さんの言葉を後押しするよつて悪戯っぽい微笑を口元にたたえて言つた。そつやつてふたりに頼まれると、僕としても断り切れなくて、じゃあ、できたら送ります、と、曖昧に了解した。

その僕の返事を聞いて、「やつたー。楽しみ。」と楽しそうに話している狭山さんとそのお姉さんを見ていると、果たして自分はふたりの期待に応えられるような小説を書くことができるだろうかと今からすくべプレッシャーを感じてきて僕は不安になつた。

それから、僕がふと気になつたのは、狭山さんのお姉さんの手元に置かれている一冊の本だつた。ガバーはついていなかつたのでそれが誰のどんな本なのかはわからなかつたけれど、ページの色あせぐらいや、適度くたびれた感じから、その本がかなり読み込み込まれていて、なおかつ大切に扱われている本だといつことがわかつた。

それで僕が何気なくその本はなんの本なんですかと尋ねてみると、狭山さんのお姉さんは僕の顔を見て、ちょっと寂しそうに微笑する

と、

「ああ。これ？これは詩集やつちやわ。夏の終わりの静かな風つていう題名の。」

と、教えてくれた。

お姉さんがそう僕に教えてくれたとき、狭山さんがお姉さんの顔をどこか気遣わしげな眼差しで見つめたのが、僕はちょっと気にな

つた。

「マリー・クロードっていうフランスの詩人が書いた本やつちやけどね、吉田くんは知ってる?」

「僕はお姉さんの間に全然わからないとこつよつこ首を振った。

「僕はほとんど詩は読まない人間だから。」

僕が苦笑して言つと、お姉さんも軽く口元を綻ばせて、

「わたしも全然詩なんて読まん人間やつたちやけど、前付を合つちよつたひどがすぐ詩とか読むのが好きなひとでかいね、そのひとにオススメされて読むうちに、わたしも好きになつたとよね。」

と、お姉さんは言い訳するように続けて言つた。

「どんな内容の詩なんですか?」

と、僕は興味を惹かれて尋ねてみた。

すると、お姉さんは僕の顔から本の上に眼差しを落とすと、少しの間じう説明したものか考えるように黙つていて、やがて顔を上げて僕の顔を見ると、

「ちょっと一口で説明するのは難しいぢやけど、なんていうか、ほんの少し哀しくて、でも、優しい詩やね。」

と、説明してくれた。

「この詩を書いたひとは女のひとで、その作者には敬愛にするお兄さんがひとりいたんだけど・・・」

と、お姉さんは言つた。

「そのお兄さんは音楽がすごく好きなひとで、自分で作曲したり、歌を歌つたりしちょて・・そのお兄さんはプロのミュージュシャンになることを目指しちょつたぢやけどね、でも、現実は厳しくて、なかなか音楽では芽がでなくて・・それで最後お兄さんは自分の才能のなさに絶望して自殺してしまつぢやけどね。」

「・・・何かちょっと哀しい話ですね。」

と、僕は言った。すると、お姉さんは僕の言葉に軽く頷いて、「それで、この夏の終わりの静かな風についての詩集は、その死んでしまったお兄さんのことを持つて書いた詩集やつやつわ。」と、説明した。

「やつやつ。」

と、僕はお姉さんの説明に頷きながら、何日か前に妹と交わした会話をふと思い出した。

「でも、なんで夏の終わりの静かな風についてのタイトルなんですか？」

と、僕は気になつて尋ねてみた。

すると、お姉さんは何かを確認するようにまた本の上に眼差しを落として、「それは、この作者のお兄さんが死んでしまったのが夏の終わりやつたから。」

と、静かな声で答えた。その声には、どこか誰のことを偲ような寂しげな響きがあった。それから、お姉さんは本を開いてページを繰ると、とあるページで手を止めて、

「ここに書いてる詩がわたしが一番好きな詩やつやわ。そんなに長くない詩やかい、ちょっと読んでみてよ。」

と、お姉さんはそのページを広げたままの状態にして僕に本を手渡してくれた。

僕はわかりましたと答えて、そこに書かれてる、それほど長いではない詩に目を通してみた。

今年もまた夏が過ぎ去るうとしている

あなたの大好きだつた夏がまた終わろうとしている
あなたはまるで夏が終わってしまうのを嫌がるみたいに
ひとり

わたしを残して遠くにいってしまった

どうしてなの？

わたしはまたあなたのその優しい歌声が聞きたいのに
今年もまた夏が終わって寂しいねって話したいのに
もうどこにもあなたはいないのね

もうどこへ行つてもあなたの歌声を聞くことはできない
永遠に

ねえ わたしはこれから夏が失われてしまつて
永久にわたしの大嫌いな凍てつく冬で世界が満たされてしまつた
としても

あなたに戻つてきてほしいの
あなたの歌声が聞きたいの
側にいて

昔みたいにわたしに色んな話を聞かせて欲しいの

いま、夏の終わりを告げる静かな風が
そつと耳元を吹きすぎていつた
その風は穏やかな海原を渡り
鮮やかな緑の木々の葉をそつと揺らし
わたしの耳元をたどり着いて
何か美しいものが碎けてしまつときのよう
そつと音を解き放つていく

そしてそれはほんの少し

あなたの歌声に似ている気がする

少しだけ哀しくて

だけどとても優しく感じられるその歌声に

わたしは夏が終わってしまうのが寂しい

だけど でも

いつも想ひにこしたの

わたしはわたしにできることをじょうひつて

わたしは何ができるだらひつて

あなたの代わりに

わたしにできることが何があるかもしれないって

そこに書かれていた詩を読み終わると、哀しいような優しいようなそんな不思議な気持ちになつた。確かにそこに描かれている詩の内容はとても哀しいものなのだけれど、でも、その詩の底流に流れている、兄を慕う優しい想いのせいなのか、まるで心が淡い水色の色素を持つたやわらかな水に包まれたように、ただ哀しいだけではなくて、同時にとても穏やかな気持ちになることもできた。

たとえばそれは突然降り始めた夏の雨が道端の草の花を濡らし、やがて雨が上がったあとに、草の花についた細かな水滴を目にしたときのような、心に涼しいような、甘いような感覚を、その詩は僕

にふと感じさせた。

「何か哀しい詩だけど、でも、不思議と優しい気持ちにもなれる詩ですね。」

と、僕は受け取った詩集を狭山さんのお姉さんに返しながら感想を述べた。

「そうやろ。」

と、お姉さんは僕の手から詩集を受け取りながら田中元で微笑んで言つた。

「狭山さんも、この詩集読んだことあるの？」

と、僕は狭山さんの顔に視線を向けてなんとなく訊ねてみた。すると、狭山さんは僕の顔を見ると、苦笑するように小さく田中元を綻ばせて、

「わたしは詩なんて興味ないって言つたんだけど、お姉ちゃんがみんなりしつこくオススメするから」

と、答えた。

「でも、よかつたやろ？」

と、お姉さんが狭山さんの顔を見て[冗談めかして尋ねると、狭山さんは、

「まあね。」

と、小さく笑つて認めた。

「吉田くんも気が向いたら読んでみてよ。」

と、お姉さんは僕の顔に視線を戻すと言つた。

「わりと有名な詩集だし、大きな本屋さんに行けば大抵おいてあると思つかい。」

「そうですね。また今度探してみます。」

と、僕は微笑んで答えた。

それから、狭山さんのお姉さんが突然狭山さんにピアノを弾いてよと言い出して、この病院にある、レクレーション室のよつたな場所にみんなで移動することになった。

狭山さんのお姉さんは、狭山さんがお見舞いに来てくれたときは毎回必ずとじつていいほどにひやつて狭山さんにピアノを弾いてもらつてじるよつで、狭山さんが今日は吉田くんがいるから恥ずかしいと言つても、お姉さんはこの哀れな病人の唯一の楽しみを取り上げる気?と本気とも冗談とかもつかないよつたな口調で狭山さんを脅して半ば強引に狭山さんにピアノを弾くことを了解させた。

「ゆかりは小学校一年生のときから高校三年のときまでピアノを習つてたからす」ぐくピアノが上手なのよ。」

と、お姉さんは狭山さんのことを見てからかひつよつに言つた。

「じゃあ、楽しみですね。」

と、僕が微笑んで言つと、

「すゞく下下手そだからあんまり期待しないでね。」

と、狭山さんは小さく笑つて否定した。

ピアノはまるで学校の教室のよつた、二十畳程はありそつたただ広い部屋の片隅にちよこんとあつた。

その部屋はもともとお見舞いについてきた子供たちが退屈したりしないよつにするために設けられた部屋のよつで、積み木などの玩具や、やわからいゴム製のボールなどのよつな遊具が置かれてあつた。そしてそのなかに混じつて、どこか寂しそうに、黒のアップラ

イトピアノが、窓際の方にひとつだけぽつんと忘れ去れてしまったよつにあつた。

僕たちはそのままアッパライトピアノが置かれている場所まで歩いていった。

狭山さんはピアノの前の椅子に腰を下ろすと、そのピアノの蓋を静かに開けて、鍵盤の上にかけられている赤い布を取り除くと、何か大切なものに触れるときのようにそつと鍵盤の上に両手を添えた。

「いつもの曲を弾いてよ。」

と、お姉さんがリクエストした。

「いつもの曲って？」

と、狭山さんが不思議そうにお姉さんの顔を見ると、お姉さんは、「ターンターンターターターター」

と、何か曲のフレーズらしいものを口ずさんだ。

そのお姉さんが口ずさんだフレーズを耳にして、狭山さんはお姉さんが詠おうとしている曲が何の曲なのかすぐに理解できたようだ、「わかった。ベートヴェンのピアノソナタね。」

と、笑顔で言つた。

「そう。そう。たぶんそれ。」

と、お姉さんは小さく笑つて言つた。

「ベートヴェンのピアノのソナタ、吉田くんは知つてる？」

と、狭山さんは僕の顔に視線を向けると楽しそうな口調で尋ねてきた。

僕は狭山さんの間に首を振つた。

「僕は普段あんまりクラシックとか聞かないからね。」

僕が苦笑してそう答えると、狭山さんは、

「でも、すごく有名な曲だから、吉田くんもどこかで一度くらいは

耳にしたことがあるんじゃない?」「
と、明るい声で言った。

それから、狭山さんは鍵盤の上に視線を戻すと、何か神経を集中させるように軽く瞳を閉じた。僅かな沈黙ができて、その沈黙な中には、窓の外の、ずっと遠くに見える海の潮騒の音が響いてきそうにも感じられた。

やがて、狭山さんは閉じていた瞳を開くと、ゆうべつとピアノを弾き始めた。

その狭山さんが弾き始めたピアノの曲は、確かに狭山さんが言ったとおり、僕もどこかで耳にしたことのある曲だった。たぶん小学校の授業や、何かのCMの挿入曲で。

その音楽に耳を傾けながら僕がふと思い出したのは、さつき狭山さんのお姉さんに見せてもらった詩集だった。その音楽の表面全体を包んでいるものは、悲しみや喪失感といった感情なのだけれど、でも、その音楽の芯の部分に、何かゆつくりと希望へと変わって行きつつあるものを、あるいは希望を模索して彷徨う意志のようなものを、僕は感じ取ることができるように気がした。

目を閉じて狭山さんの奏でる旋律に意識を集中させていると、まずイメージのなかに浮かんでくるのは白い、一輪の花だった。そしてその一輪の白い花は、深い湖の底で冷たい水に揺られながらそつと誰に知られることもなく咲いている。

深度の深いそこには普段あまり日の光が差し込まない。一日の大部分の時間が微かに青色の色素を含んだような薄闇に満たされてしまっている。でも、一日の「いくわざかな短い時間の間だけ、そんな深

い湖の底にも太陽の光が差し込むことがある。

やがて彼女にとつては永遠とも思える距離から、太陽の、その微かに金色の色素を帯びたやわらかな光が差し込み、彼女の身体を優しく包み込む。その澄んだ温かな光に包まれた彼女の身体は束の間、まるで彼女が光そのものになつたかのように美しい輝きを放つ。

狭山さんの演奏に耳を傾けながら僕が思い浮かべたのはそんな光景だった。

「す」「くきれいな曲だね。ちょっとだけ哀しい感じもするけど、でも、全般的に深い優しさに満たされているつていうか、上手く言えなわけです。」

僕は狭山さんの演奏が終わるとこへらか興奮して言つた。

「ありがとう。」

と、狭山さんは僕のコメントにちょっと照れ臭そうに笑つて答えると、

「だと、わたしもこの曲好き。たぶん、わたしが知つてるピアノ曲のなかでは一番好きなんぢゃないかな。」

と、狭山さんは楽しそうに微笑んで言つた。それから、狭山さんはお姉さんの顔に視線を向けると、

「お姉ちゃん、今日のわたしの演奏はどうだった?」

と、冗談めかして尋ねた。

「少なくとも八十点はいつてると思つたんだけど。」

その狭山さんの言葉に、お姉さんはわざとらしくじぶい表情を作つてみせると、

「全然。四十五点つてといひやつちやない?」

と、首を左右に振りながら言つた。

その点数を聞いて狭山さんがちょっと不服そうにドドードーと声を上げ

ると、お姉さんは可笑しそうに笑つて、

「冗談やが。もちろん百点に決まつちよがね。」

と、明るい口調で言つた。それから、

「わたしのために素敵なお演奏をありがとひ。」

と、微笑んで改まつた口調で言つた。

「これで病氣も早く良くなる気がする。」

「こんなわたしのヘタクソな演奏で姉ちゃんの病氣が早く良くなるんだつたら、わたし何万回でも弾いてあげるわよ。」

と、狭山さんはお姉さんの顔に視線を向けると、優しい笑みを口元に広げて言つた。

「ありがとひ。」

と、お姉さんは小さく笑つて言つた、それから僕の顔に視線を向けて、

「さつきの曲は、たぶんゆかりはまだ小さかつたら覚えてないと思つちやつけど、わたしのお母さんが好きでよく弾いてた曲やつちやわ。だから、あの曲を聞くとね、すゞく気持ちが落ち着くよね。わたし。」

と、お姉さんは口元に微笑を浮かべて言つて訳するよひに言つた。

「ねえ、見て。」

と、唐突に、狭山さんがお姉さん言葉を遮つて言つた。

それで僕が狭山さんに視線を戻してみると、狭山さんは窓の外に視線を向けていた。僕は狭山さんの視線の先を辿つてみた。するとそこには、灰色の厚い雲を切り裂いて太陽の光がいくつもの巨大な柱となつて地上に降り注いでいる光景が見られた。

「すゞくきれいじやない？」

と、狭山さんは目の前に広がる光景に微かに目を細めて言つた。

「そうだね。」

と、僕は相槌を打つた。

巨大な光の束のうちのいくつかは遠くに見える海にもたどり着き、
その暗い海面の一部分を黄金色の光に優しくきらめかせていた。

「明日は晴れね。」

と、お姉さんが決め付けようつに言った。

狭山さんのお姉さんと別れて病院をあとにしたのはもう午後の五時過ぎだった。

帰りもやはり狭山さんが車を運転して帰ったのだけれど、その車を運転する狭山さんの表情は病院にいるときに見せていました明るい表情とは違って、どこか沈んで見えた。言葉数も少なく、僕が話しかけても、狭山さんは何か物思いに沈んでいる様子で、ひとつ質問が次の話題に繋がつて会話が広がつていくというようなことがなかつた。

車が再び海岸線の道に入つたあたりで、狭山さんが僕に音楽をかけてもいいかと訊いて、僕はもちろんどうぞ答えた。

狭山さんが車のカーステレオのボタンを押すと、車のスピーカーから流れはじめたのは、微かに水色の色素を帯びたような、静かで纖細な感じのする女人の歌声だった。英語の歌だった。

「きれいな曲だね。誰が歌つてるの？」

と、僕は気になつたので振り向いて狭山さんに尋ねてみた。すると、狭山さんは目の前に道に視線を向けたまま、

「エミリー・ローレンスっていうひとだったかな。」

と、ちょっと自信なさそうに答えた。

「エミリー・ローレンス？」

と、僕は彼女の言葉を反芻してから、

「結構有名なひと？」

と、続けて尋ねてみた。

すると、狭山さんは苦笑するよつて軽く口元を綻ばせて、「実はわたしもあんまり詳しくないの。」と、答えた。

「ラジオでたまたま流れてて、それでいい曲だなって思つてあとでCD屋さんで探して買ったんだけど・・でも、そのときすごくわからづらい場所に一枚だけしか置いてなかつたから、そんなに有名じやないのかも。」

「そつか。」

と、僕は狭山さんの説明に頷くと、少し間をあけてから、「でも、いい曲だね。僕もこういう感じの曲結構好きだな。」と、微笑して言つた。

「・・・田を閉じて聞いていると、雨の日の田曜田の朝つて感じがしない?」

と、狭山さんちりりと僕の顔に視線を向けると言つた。

「雨の日の田曜田で、家にいてなにもやることがなくて、それで窓の外に降る静かな雨を見てるつて感じ。」

僕は試しに狭山さんがいま口にした情景を思い浮かべてみた。すると、さつき狭山が口にした通りのイメージが、今見えている視界のなかに重なるようにふうっと鮮やかに浮かびあがつてきた。

「ああ。ほんとだね。確かにそんな感じがするかも。」

と、僕は微笑んで言つた。

「でしょ?」

と、狭山さんは微笑んで言つと、

「確かにこのダッシュボードのなかにCDのケースが入つてたと思うんだけど。」

と、思いついたように言つた。

僕は狭山さんの方に視線を向けて、見てみていい?と尋ねた。狭山さんは微笑んでどうぞと答えた。

ダッシュボードを開くと、確かに狭山さんの言つたとおり、一枚のCDケースが入つていた。ジャケットにはあまり見たことのない鳥の絵が描かれてあつた。

「その鳥、絶滅しちやつてもう世界にはいない鳥なの。」

と、狭山さんは僕が手にしているCDケースにちらりと視線を走らせて言つた。へー。詳しいんだね。と僕が感心して言つと、狭山さんは、

「ケースに入つてるライナーノーツにそつ書いてあつたんだけどね。」

と、小さく笑つて言つた。

「そつか。」

と、僕は狭山さんの科白に軽く笑つて頷くと、CDケースのなかからラナーノーツを取り出して広げてみた。

「この曲、歌詞も結構いいの。」

と、狭山さんは微笑んで言つた。

「だいぶ前に読んだから、詳しい内容は忘れちゃつたんだけど、確かに暗闇のなかで希望を見つけようとする、静かな感じの詩だった思う。」

と、狭山さんは言つた。

僕は日本語に訳された歌詞を辿つてみた。

夕暮れの光は次第に薄れていつて

透き通つた青い闇が静かに世界を覆いはじめると

もうすぐ夜になるんだなってわたしは思つ

夜の訪れと共に気温は下がり

冷たい風がわたしの心から体温を奪つっていく

わたしは夜が嫌い

だつて嫌なことは大抵いつも夜に思いつくから

ねえ わたしはときどき不安になるの
このときわたしはどこにも辿り着けないんじやないかって

このときどきまで歩いていっても

出口なんどどこにもなくて

ただ同じ場所をぐるぐると

永遠に歩き続けことになるんじやないかって

きっと大丈夫だつて

声に出て

自分に言い聞かせていないと心細くて

だけど 今はそんな自分の声さえ

訪れた新しい闇のなかに吸い込まれていってしまう

所詮こんなものだつて

諦めるしかないのかな？

時間の経過と共に

どんどん夜の闇は深く濃くなつていく

でも

今日は月の明かりがとても明るいから
少しだけ

闇のなかでも平氣でいられる氣がする

月の光は友達の声みたいに明るくて
わたしの氣持ちをそつと温めてくれる

そういうえば今日、花の種を植えてみたの
きれいな花が咲くんだよつて
友達がわたしにプレゼントしてくれたから

わたしは植物なんて育てことなんてないし
ちゃんと花を咲かせられるかどうか自信がないんけど

でもね 頑張ってみようと思つの
だつて どんな花が咲くのか楽しみだし
花が咲いたときのことを想像すると
心が希望を持ったみたいに弾むから

そしてもしも花を咲かせることができたら
一番最初に見せてあげたい

友達に

ありがとうつて

想像の花が

わたしの心の周りを
そつと明るく輝かせてくれる

「何か静かな感じのする詩だね。」

と、僕は日本語に訳された詩を読み終えると、狭山さんの方を振り向いて言つた。

「まだ希望は見つからなくて不安なんだけど、でも、そこには前向きな意志があつて・・なんか読み終わつたあと、心がふわつて軽くなるみたいな感じがする。」

「ね、いい詩でしょ？」

と、狭山さんは僕のリアクションに明るい微笑を田元に浮かべて言つた。

「何か特別メッセージみたいなことは書かれてないんだけど、でも、作者の優しい想いというか、何かを信じよつとする想いみたいなものが伝わってくるような気がする。」

「そうだね。」

と、僕は狭山さんのコメントに頷いた。

「でも、この詩に書かれている、嫌なことは大抵夜に思いつくっていつのはほんとうにそうだなって思う。」

と、僕は再び歌詞カードに目線を落としながら何気なく言つた。
「僕も嫌なことは大抵いつも夜に思いつくから。」

「嫌なことって？」

と、狭山さんは目の前の道に視線を向けたまま興味を惹かれたよう尋ねてきた。

僕は少し躊躇つてから、大久保にも話したことを、狭山さんにも

話して聞かせた。自分が書いている小説のことについて。それから、これから先の将来のことについて。

「・・・確かに将来のことを考えると色々考えちゃうよね。」

と、狭山さんは僕の話を聞き終えると、少ししんみりとした口調で言った。それから狭山さんは何か考え事をするように難しい表情を浮かべて車の運転を続けていたけれど、やがて、

「わたしもね。」

と、口を開くとポツリと言つた。

「わたしも将来のことを考えるとときどき不安になるかな。」

狭山さんは少し弱い声で言つた。

僕は歌詞カードから田線をあげて狭山さんの横顔に視線を戻した。

「・・・不安になるつていうか、怖くなるの。・・・もしもこのまま上手くいかなかつたらどうしようつて。もし、お姉ちゃんの病気が治らなくて、それでお姉ちゃんが・・。」

「大丈夫だよ。」

と、僕は狭山さんの言葉を遮るようにして言つた。

「大丈夫だよ。」

と、僕は狭山さんの言葉を遮るようにして言った。

「今日、狭山さんのお姉さんにはじめてあつたけど、元気そうに見えたし・・・大丈夫だよ。治療だつて順調に進んでるんでしょ？」

「・・・うん。 そななんだけどね・・。」

と、狭山さんは僕の科白に考え込むようにして弱く頷くと、少し間をあけてから、

「今日、お姉ちゃんが吉田くんに見せた詩集あつたでしょ？」

と、唐突に言った。

「・・・あの詩集をお姉ちゃんにプレゼントしたひとと、ほんとうはお姉ちゃん、結婚するはずだったの。」

と、狭山さんはポソリと小さな声で言った。

僕は彼女が一体何の話をしようとしているのか不思議に思つたけれど、黙つて彼女の言葉に耳を傾けていた。

「・・・でもね、そのお姉ちゃんの婚約者だつたひと、死んじやつたの。」

と、狭山さん淡々とした口調で言った。

僕は狭山さんの口にした科白があまりにも唐突だったので、上手く相槌を打つことができなかつた。僕は驚いて彼女の横顔をただじつと見つめた。

「・・・交通事故だつたの。」

と、狭山さんは少しこのうな声で続けて言つた。

「車を運転してゐるときにカーブを曲がりきれてなくて……それで……。」

「……そんなことがあつたんだ。」

と、僕は少し間をあけてから曖昧に頷いた。どんなふうに感想を述べたらいいのか僕にはわからなかつた。

「婚約者が交通事故で死んじやつなんて嘘みたいでしょ？ドラマとか小説じゃないんだから。……でもね、ほんとに死んじやつたの。」

僕はどう答えるべきなのかわからなかつたので黙つていた。

「わたしもそのひとに何度か会つたことがあるんだけどね、お姉ちゃんそのの婚約者だつたひとに。」

と、狭山さんはゆつくりとした口調で話し続けた。

「……すごく優しそうなひとだつた・・予備校で英語の先生をしてるんだって話してたけど・・。」

狭山さんは、どこか遠くの、淡い色合いで霞んだ風景を見つめるようにときのよう、微かに口を細めて言つた。

「笑つたときの顔がね、すごく温かくてね・・ああ、お姉ちゃん、いいひとと巡り合えたんだなつて、そのとき思つたの・・。でもね、まさかあんなことになるなんて・・。」

狭山さんはそこで言葉を区切ると、當時のことを思い返すように少しの間黙つた。僕も何を話したらいいのかわからなかつたので黙つていた。

訪れた沈黙のなかを、カーステレオから流れくる女の人の透明な

歌声が、まるで波打ち際に打ち寄せた海のように静かに満たしていった。僕は窓の外に視線を向けると、その流れてくる音楽に耳を傾けながら、狭山さんのお姉さんが失ってしまったもののことや、そのときの狭山さんの気持ちを考えた。

「・・・じつして。」

だいぶ経つてから、狭山さんはふにに口を開くと言つた。僕は窓の外に向けていた視線を再び狭山さんの横顔に戻した。

「・・・じつして今度はお姉ちゃんが病気ならなくちゃいけないの。」

狭山さんは齒くよつた声で言つた。それは僕に向かつて話しかけてこるといつよりも、ただ心に思つたことをそのまま口にしただけのよう感じられた。

「・・・お姉ちゃん、あのひとが死んだとき、すぐ哀しんだのに・・・ほんとにほんとに哀しんでやつと・・それなのにじつして今度はお姉ちゃんが病気ならなくちゃいけないの。」

狭山さんはほんの少し感情的な口調になつて言つた。

「だつて、お姉ちゃん、あんなに哀しい思いをしたんだから、もつと幸せになれてもいいはずでしょ。それなのにじつして・・・」

狭山さんの科白は最後の方、ほとんど泣き出しそうな声に変わつていた。

僕は狭山さんの言葉に何か答えなきや、何か言わなきやと思つたけれど、でも、結局、僕は何も言葉を見つけることができなかつた。

狭山さんは車を道端の隅に寄せて停車をすると、顔を両手で覆つ

ようして泣いた。僕はなんとか彼女を慰めてあげたいと思つたけれど、こんなとき、何をどうしたらいいのかわからなかつた。僕は声を殺して泣いている彼女の横顔をただ見つめていたことしかできなかつた。僕は自分の無力さを情けなく感じた。

さつきまで流れていた音楽はいつの間にか聞こえなくなつていた。

いくらか長い沈黙のあとで狭山さんは顔を覆つていた両手を擱ると、その細い、きれいな指先で涙を拭いながら、

「…「ごめん。」

と、掠れた小さな声で謝つた。

「突然変なこと言い出して。」

僕は彼女の言葉に軽く首を振つてそんなことないよと答えた。「こんなこと話すつもりじゃなかつたんだけど…それに泣いちやつたりして…わたしバカみたいにだよね。ほんとにごめん。」と、狭山さんは僕の顔に視線を向けると、取り繕うように小さく笑つて言つた。

僕は誰にでも泣きたいときはあると思つて、泣きたいときは思い切り泣いちゃつたほうがいいよと言つた。

狭山さんは僕の言葉に田元で微かに微笑むと、小さな声でありがとうと言つた。

それから、狭山さんは僕の座つている助手席の窓に田を向けると、

「見えないね。全然。曇つてるせいだ。」

と、いくらか唐突に言つた。

「見えない？」

僕は狭山さんの言つた言葉の意味がわからなくて訊き返した。すると、狭山さんは可笑しそうに少し口元を綻ばせて、

「夕暮れの光。」

と、穏やかな口調で言った。

僕は振り向いて窓の外に目を向けてみた。すると、そこにはどんよりとした灰色の空が見えた。もうどっくの昔に夕暮れの光が広がつていてもおかしくないはずなのに、ただ空には灰色の色素がぼんやりと広がっているだけだった。

「こまま夜になつちやうのかな。」

と、狭山さんは窓の外に視線を向けたまま残念そうに言った。

「そうかもね。」

と、僕は少し考えてから答えた。

「わたし、お姉ちゃんのお見舞いにいつたあと、こまやつて海岸線の道に車を停めてひとりで夕暮れの空を見るのが空きだつたのにな。」

と、狭山さんは窓の外に視線を向けたままそつ冗談めかして言つと小さく笑つた。それにひきかれて僕も少し笑つた。

窓を開けてみると、海の匂いが感じられた。それから微かに潮騒の響きも聞こえた。窓の外には防波堤があつて、その向こう側には砂浜と海が見えた。

狭山さんがあつと海を見ていかない？言つて、僕はいいねと答えた。

僕たちは車から降りると、防波堤を乗り越えて海の方まで歩いていった。

遊泳禁止の海なので浜辺には誰もいなかつた。浜辺にはいつ死ん

だのか、亀の白骨化した死体があつた。でも、それはあまり不気味だという感じはしなくて、ただいつかは失われてしまう命の儂さのよつなものを感じただけだつた。

田の前に広がる海は何日か前に降つた雨のせいでいつもよりも荒々しかつた。波打ち際には打ち上げられた海草や、流木などがたくさんあつた。

繰り返し響く波の音はじつと聞いていると、恐ろしこよつでもあり、懐かしいようでもあつた。海のずっと遠くの向こうには一隻の船が浮かんでいるのが見えた。それはとても小さな漁船のよつに見えたけれど、もしかすると、巨大なタンカー船か何かなのかもしけなかつた。

狭山さんはしばらくの間波打ち際付近に立つて、何か自分の思考のなかに沈みこんでいる様子でいたけれど、やがて振り向いて僕の顔を見ると、

「吉田くんは明日東京に戻っちゃうんだよね？」
と、唐突に訊いて来た。

「うん。」

と、僕は頷いた。

「明日の十時四十分の飛行機で東京に戻るよ。」

と、僕は答えた。

「そつか。」

と、狭山さんは僕の言葉に頷くと、

「寂しくなるね。」

と、言つた。

「そうだね、と、僕は言つた。

「東京に戻つてもときどきメールちょうどいいね。」

と、狭山さんは微かに目元で微笑んで言った。

「ほり、お姉ちゃんに小説見せるつていう約束もしたし。」

「そうだね。」

と、僕は苦笑するように微笑して頷いた。

「楽しみだな。吉田くんの小説。」

と、狭山さんは冗談めかして言った。

「あんまり期待されても困るけど。」

と、僕は苦笑いして言った。

それから少しの沈黙があつて、僕も狭山さんも黙つて田の前に広がる海を見つめていた。たくさんの潮騒の響きと、風の音が通り過ぎて行つた。そしてそれらの音を重ね合わせようにして聞いていると、それはどうしてか誰かの哀しきな歌声を聞いているようにも感じられた。

いくらか長い沈黙のあとで狭山さんは口を開いて何か言った。

「なに?」

僕は狭山さん言つた言葉がよく聞き取れなかつたので訊き返した。すると、狭山さんは苦笑するように口元を綻ばせて、なんでもないと軽く首を振つた。そして微笑んでもう帰らつかと狭山さんは言った。そうだねと僕は頷いた。

狭山さんは僕に背を向けると、ゆつくりと歩き出した。僕はそんな狭山さんの少し後ろを後れて歩いた。狭山さんの背中のあたりまである髪の毛が風に吹かれて時折寂しそうに揺れた。

「花。」

と、狭山さんは突然立ち止まると、足元の地面を指差して言った。
なんだろうと思つて狭山さんの指差している地面のあたりを見てみると、そこには名前の知らない花がいくつか咲いていた。それは、
小さな、白い、きれいな草の花だつた。その花は海から吹き付けて
くる強い風に震えながら、そつと静かに咲いていた。

狭山さんのお姉さんが予言した通り、翌日は晴れになった。空には巨大な入道雲がもくもく広がっていて、それは僕の好きな、ほんとうに夏らしい空だった。

父親と母親は仕事の関係で出かけることができなかつたので、飛行場までは妹の運転する車に乗つていった。

飛行場について車から降りると、涼しい風が吹きすぎていつた。空港に植えられている木々の葉が風に揺れて、その風に揺れる木々の静かなざわめき聞いてみると、もう夏も終わりなんだな、と、改めて実感した。

空港のロビーでチェックインを済ませると、まだ搭乗時間までには間があったので、僕たちは空港内にあるレストランで食事をとることにした。

まだ比較的朝の早い時間なのでレストランは空いていて、僕と妹の一人はウェイトレスの女の子に窓際の席に案内されて、向かい合わせに腰を下ろした。

レストランの大きな窓からは、これから空に向かって飛び立とうしている飛行機や、今までに着陸しようとしている飛行機の姿を目にすることができた。

程なくして注文を取りに来たウェイトレスに僕はラーメンとチャーハンのセットを注文し、妹はカツカレーを注文した。

注文した料理はすぐに運ばれてきて、僕たちはどちらかとこうと

口数少なくその運ばれてきた料理を食べた。

「夏も終わりやね。」

と、妹は料理を食べ終えると、お冷の入ったグラスを口元に運びながら、窓の外に視線を向けて独り言を言つよう言つた。僕も妹と同じように窓の外に視線を向けて、

「そうだね。」

と、同意した。

「わたし、夏が終わつてしまつとと思つところも寂しい気持ちになるつちやわ。」

と、妹は笑つて言つた。

「わかる気がするけど。」

と、僕は妹の言葉に軽く笑つて答えた。

少しの沈黙があつて、僕は窓の外の景色に視線を向けたまま、テーブルの上のお冷を取つて一口飲んだ。

「・・・なんかどんどん変わつていつてしまつがね。」

と、しばらくの沈黙のあとで妹が口を開いてポツリと言つた。

僕は手にしていたお冷のグラスをテーブルの上に置くと、妹の顔に視線を戻した。

「だつてよ、ほんの何年か前まではよ、わたしが車を運転して空港に来て、こうして兄ちゃんとふたりでご飯食べるなんて考えられんことやつたわ。でも、今ではそれが当たり前のことになつちよかいね。それを思うと、不思議な気持ちになるね。」

「そういうえばそうだよね。」

と、僕は笑つて答えた。確かにほんの何年か前まで、兄妹ふたりだけで空港に来ることなんてまず考えられないことだつた。ほんの僅かな時間の間に、ずいぶん色んなことが変わつてしまつたんだな、と、僕はふと感じた。そしてこれからもどんどん変わつていつてしまつた。

まつのだらうと思つた。

「兄ちゃんはこれからどんなげすつて？」

と、妹はいくらか唐突に聞いてきた。

「どうするつて？」

と、僕が訊きかえすと、

「まだしばらくは小説書いていくつちやん？」

と、妹は続けて言つた。

「・・・うん。どうだろね。」

と、僕は軽く眼差しを伏せて、曖昧な答え方をした。僕の心のなかでまた僕自身の弱さが身動きするのが感じられた。

今朝、空港に向かって出発する際に、父親と母親にそろそろ将来のことを真剣に考えたほうがいいんじやないかといわれたことが、いくじか重く思い出された。確かに父親と母親の言葉にも一理あつた。

「・・・わたしはもうちょっと頑張つて欲しいと想つけんね。」

と、妹は静かな口調で言つた。

「せつかくここまで続けてきたっちゃかによ、自分が納得いくまでやつた方がいいと思うけんね。」

と、妹は僕のことを励まそうとしててくれているのか、そんなことを言つてくれた。

僕は妹の言葉を否定も肯定もせずに、ただありがとうと小さく笑つて答えた。

飛行機が空に飛び立つていく大きな音が窓の外に聞こえた。

妹とは手荷物検査の列に並んだところで別れた。妹はこれから地元の町に戻ったあと、友達と出かける予定があるようだつた。

妹がバイバイと手を振つて、僕もバイバイと小さく手を振つた。

手荷物検査を終えて空港の出発ロビー内に入ると、僕は適当に空いている席を見つけて腰を降ろした。出発時間まではまだ二十分以上もあつた。

ロビー内は出張か何かでこれから出かけると思われるスーツ姿の男ひとや、子供連れの若い男女の夫婦の姿や、老夫婦や、旅行帰りと思われる、よく日焼けたした大学生ぽいひとたちの集団や、とにかく色んなひとたちがいた。そしてそれらのひとたちはみんな楽しそう笑つたり、喋つたり、あるいは忙しそうに携帯電話で誰かと話をしたりしていた。

僕だけが、ひとりぼっちで、特に何もやることもなぐいるような気がした。

僕は飛行機に乗る前にケータイ電話の電源を切つておかなきやと思つて、ケータイ電話を鞄のなかから取り出した。そして電源を切るうとしたところで、ケータイ電話に一件のメールが届いていることに気がついた。バイブルの状態にしておいたので全然気がつかなかつたのだ。ひとつは大久保からのもので、もうひとつは狭山さんからのものだつた。

大久保はメールのなかで、この前は久しぶりに色々話がてきて楽

しかつたと書いていた。そしてお互い色々大変だけど頑張ろうと書いていた。

僕はその大久保のメールに対し、こっちも久しぶりに色々話せて楽しかつた、大久保のおかげで前向きな気持ちになることができたとありがとうと書き、また今度富崎に帰ってきたときはぜひ会いましょうと文章を続けてメールを送信した。

狭山さんはメールのなかで、まず昨日突然泣き出したりしてしまってごめんと謝っていた。あのときは頭のなかが少し混乱してしまつていて、それで自分でも思いがけず泣いてしまったのだ、と、狭山さんはメールのなかで書いていた。

それから、狭山さんはお姉ちゃんのお見舞いに付き合つてくれてほんとに感謝していると続けた。お姉ちゃんも吉田くんに会えてすごく喜んでいたみたいだから、と。

最後、狭山さんはこういう文章でメールを締めくくつていた。

生きていると、思い通りにいかないことも、上手くいかないことがたくさんあつて、ときどき哀しくなつて、全てを投げたしてしまいたくなるときがあります。でも、そういうとき、わたしは樂しかつたことや、いつも側にいて励ましてくれる大切なひとたちのことを思い浮かべることにしています。

そうすると、少しだけ、そんな感情がやわらぐ氣がするからです。吉田くんも何か嫌なことがあつたり、自信がなくなつてしまいそうなときは、をするといいんじゃないかなつて思います。

きっと信じて頑張つていれば必ず良い結果が得られるはずだとわ

たしは思います。あるいは「これはきれい」とにすぎないのかもしれないけど、でも、それを否定してしまつたら何もはじまらないと思うし、もし仮にいい結果が得られなかつたとしても、どちらようによつてはその上手くいかなかつたことさえも、わたしたちのこの長い人生においては何かの役に立つんぢやないかなつて思います。

これは誰かの受け売りだけど、人生に無駄なことなんてひとつもないと思います。少なくともわたしはその言葉を信じたいと思つてあります。

わたしはいま昨日車のなかで聞いていたHミリー・ロレンスの歌を聴いています。彼女の歌声を聞いていると心が落ち着く気がします。そしてわたしも心のなかに想像の花を咲かせようと思います。ケータイのメールなのには「ごく長くなつてしまつてごめんなさい。P.S.、吉田くんの小説、わたしもお姉ちゃんもすごく楽しみにしています。では。

僕は狭山さんのメールを一度読み返してから、ケータイ電話の電源を落として鞄のなかにしまつた。僕の乗る飛行機の搭乗案内がはじまつていて、そろそろ搭乗口にいかなければならなかつた。狭山さんはまた東京についてから改めてメールを送ろうと思った。狭山さんには僕の方からも色々伝えたいことや、感謝したいことがたくさんあつた。そして狭山さんのメールは、単純に僕の心を暖めてくれた。

平日のせいなのか、飛行機それほど混雑していなかつた。

僕の席は通路側の席だった。

僕の席から一個あけた、窓際の席に座ったのは、僕と同じ年くらいの女の子だった。彼女はどことなく狭山さんに似ていた。一瞬、ほんとにとなりに狭山さんが座ったのかと思ったくらいだった。彼女の横顔は、どことなく寂しそうに映った。気を緩めると、とたんに溢れてしまいそうになる悲しみの感情を、彼女は必死になって気持ちの内側に押しとどめようとしているみたいに思えた。

間もなくして飛行機は乗客全員を乗せたことを確認するとゆつくりと動き出し、滑走路に入ると、やがて空に飛び立った。

飛行機が空に飛び立つと、僕はなんとなく窓の外の様子が気になつてちらりと窓の方に視線を向けてみた。そしてその際に、となり座っている女の子の様子も一緒に視界にはいった。

彼女は顔を心持窓の方にもたせかけるようにして、目を閉じていた。それは眠くて目をとじているといつよりも、何かが通り過ぎていくのをじつと我慢しているみたいに見えた。

僕は視線をもとに戻すと、ここ一週間ばかりの、実家に帰つてきながらの日々のことと思い返してみた。妹と交わした会話や、大久保と話したこと。それから、狭山さんのお姉さんに会つたこと、そしてその帰りに狭山さんが僕に話したこと。

しばらくしてから機長の簡単な挨拶があり、そのあとで機長は東京に着くのは一時間四十分後で、東京は現在雨が降つていると告げた。天候の関係で、東京に近づくにつれて多少揺れることが予想されているが、揺れても飛行に影響はないので安心して欲しいと機

長は告げた。

機長のアナウンスが終わると、東京は雨が降っているんだ、と、なんとなく僕は思った。折りたたみの傘を準備してこなかつたことが少し悔やまれた。

特にやることもないのでは目を閉じて眠りうとしたのだけれど、変に気が高ぶつてしまつてなかなか寝付くことができなかつた。

僕は諦めて起きていることにした。そして狭山さんは今頃何をしているのだろうと僕は考えた。もしかすると今頃狭山さんはお姉さんの入院している病院にお見舞いに行つているのかもしれないなと僕は想像した。

今見えている視界のなかに重なるように、狭山さんと狭山さんのお姉さんが楽しそうに談笑している映像がふつと浮かんすぐに消えた。

僕は狭山さんのお姉さんがこのまま何事もなく無事回復することを祈わずにはいられなかつた。お姉さんは最愛のひとを事故で失つてしまつていて。それがこのうえ、彼女自身が病氣で死んでしまうとしたら、それはあまりにもひどすぎる僕は思った。

そしてもしお姉さんが死んでしまつたとしたら、その哀しみに狭山さんをさきつと耐えられないだろうと僕は思った。

僕は彼女たちのために何かしたいと思つた。でも、僕が彼女たちのために何かしてあげることなんて何もないよつて思えた。でも、しばらく考えていくうちに、もしかしたら、小説を書くことくらいだったらできるかもしないと僕は思つた。

僕が彼女たちのためにしてあげられる」となんてほとんどの何もないけれど、でも、彼女たちに喜んでもらえるような小説を書くことくらいだったら、なんとかできるかもしれないと思つた。

僕は彼女たちのために小説を書こうと決意した。その小説を読むこととで彼女たちが少しでも励まされたり、前向きな気持ちになることができる小説。たとえば、昨日、海辺に咲いていた、小さな、白い、美しい花のようだ。

僕はふと氣になつてとなりに座つてゐる女の子の方にちらりと視線を向けてみた。彼女はさつき同じようにじどうからかとこつと哀しそうに瞳を閉じたままだつた。

僕はいつか書けるようになりたいと思つた。いまとなりに田を開じて眠つてゐる女の子や、狭山さんや、そのお姉さんや、大久保や、妹や、そして僕自身に希望を感じることができるような小説が。

そのために必要なのはまず書き続けることだと僕は思つた。そんな小説を書くことなんて永遠にできないのかもしれないけど、でも、まずは努力してみるとことだと僕は自分自身に言い聞かせた。

飛行機の窓の外には雲ばかりが見えた。気流が悪いところを飛行しているらしく、飛行機は時折小刻みに揺れた。

そのうち、これまでの細々とした、色んな疲れが押し寄せてきて僕は瞼が重くなるのを感じた。僕は田を開じると少し眠ることにした。

田を覚ました頃にはきっと東京に着いているだらうと思つた。雨の降る東京が僕のことを待つていると僕は思つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4067c/>

夏の終わりの静かな風

2010年10月18日09時20分発行